

## 当時の炊事と食料

「いいぞいいぞとおだてられ、死のものぐるいで来てみれば、朝から晩まで飯炊きで、景色なんぞは夢のうち」自分たちを哀れんで皆で歌ったものだが、山岳部の新人のエレジーをよく表している。しかし、「地獄の二丁目山岳部、好んで入るバカもいる」と歌いながらも、皆結構楽しんでいたのである。

昭和20年代後半から30年代にかけて、太平洋戦争後の登山が復活し登山ブームが起こった。戦後の平和の中で抱くことのできた「ゆとり」であったろうし、一方、身近な楽しみ方の一つでもあった。さらには、戦争で闘うという目標を失った若者達が、何かに挑む場として登山があったのかもしれない。

当時の山の炊事は大変であった。ホーブスやスペアというガソリンや石油を使う火器はあったものの、石油類を運ぶタンク類が不備だったし、油そのものも高価だったので、冬山や、夏山の雨の大降りの時以外はめったに使用することはなかった。大方は枯枝を集めて燃料とし、たき火で炊事したわけである。

一日の行動が終わると、炊事当番のもの以外は皆なたやのこぎりを持って、這松の枯枝などを集めた。小雨は言うにおよばず相当な雨降りでも、炊事は焚き火で行わなければならぬから、濡れていたり、そうでなくとも湿った這松で火を焚くことは容易なことではなかった。特に朝の炊事は大変だった。午前1時か2時には起床して炊事にかかる。一旦火がつけばなんとかなるが、そのたきつけが難しい。炊事当番は夜のうちに朝のたきつけ用の小枝を20~30cmぐらいに折って直径15cmぐらいの束を2つ3つ作り、それを夜抱いて寝ていた。雨が降っていても、マッチ1本、新聞紙1枚で火をつけることが、山岳部員としては、一丁前ということになっていた。

食事は平成年代の今に比べれば、それは粗末というか質素なものであった。しかし、その食事も特にみじめな気持ちになるようなものではなかったし、当時考えられる最高のものであった。食料は米が主食であったため、冬山を除いては朝昼晩と三食悉く米飯であった。炊事当番は朝食のごはんを盛りつけると皆を起こし、その間に昼食用のご飯を火にかけた。飯盒で炊くご飯は失敗が少ないが、大なべで炊くご飯作りは難しい。ご飯が芯飯になると上級部員に怒られた。大なべで炊いた昼食用のご飯が大鍋ごと落ちないようにキスリングザックに取りつけることも実に難しかった。

冬山の水の確保は困ることはなかったが、夏山では川がなかったり雪渓がないところで

は、池のたまり水の水をすくって使うこともあった。ぼうふらの泳いでいた水では赤茶けたぼうふらご飯ができた。水筒類も不足していて飲料水確保がやっとであったから、炊事用の水を持ち運ぶことなどとても考えられなかった。雪渓の雪をキスリングザックにつめて谷間から背負い上げることもあって、夏場の縦走では大人数のパーティの水の確保は一仕事であった。

米飯食事では味噌汁が決まりものであった。味噌汁の具に乾燥わかめを使うことが多かったが、店頭からのものをそのまま持ちこむものだから、塩辛くなってしまうこともしばしばであった。合宿の初めはキャベツなど生野菜があったが、後半は玉ねぎやジャガイモだけになってしまふ。荷物を少しでも軽く、しかも痛まない野菜をということで、乾燥野菜の研究もした。だいこんや人参の乾燥野菜も作った。現地調達としてはネマガリダケやウドなども食べたが、あざみの葉を一番食べたように思う。

料理の一種に「信大料理」というのがあった。雨の降りがきつくご飯を炊くのがやつの時など、玉ネギとキャベツを刻みそれを味噌和えにして、いうなればサラダであるが、これがなかなか好評であった。他に米2.65升、玉ネギ7個、大根3本、ジャガイモ10個という記録がある。当時米は1食1.5合で計算されていて、この料理なるものはこれらの食材をごっちゃ煮した雑炊だったわけである。

おかげは何を持っていいか頭を悩ませた。合宿の食料費と夏山の合宿期間20日間以上を考えると、塩気の強いものしか用意できなかった。カンヅメ類は高価であり重量もかさむので、ほんの少量しか持てない。しかも非常食と考える気持ちが強いから、一つの合宿が終わると次の合宿にまわすという具合で、ずいぶん長い間持ち歩いたことになる。安いものとなるとコンブの佃煮ということで、これを木箱詰めのまま買って持っていくものだから、明けても暮れてもコンブのおかずで、髪の毛や髭が紫色になったと笑ったほどであった。干だらは安かったし長持ちしてよかったです、ソーセージは高級品で日持ちが悪かった。くさりかけたソーセージをもったいながって食べた者が腹痛をおこしたことがあった。こんな具合だったから、カロリー計算も試みたが食料に大きな変化はなかった。

特筆すべきものとして「モーニング」というのがあった。何故モーニングなのかは忘れたが、ニンニクに味噌をつけて食べる所以である。テントの中で自分だけ食べないでいると大変なことになる。まわりの人の体臭が強烈なので、「からい、からい」といしながら皆よく食べた。夜食べると体が温まって翌朝は快適だった。ニンニクは冬山には絶対必要なものだったし、夏山の雨でびしょぬれになった体も中からぬくぬくとして、濡れた衣服まで乾く程であった。ただ困ったことは、夏山の縦走路ですれちがった美しい娘さん達が一

様に変な顔をすることだった。その外、砂糖を入れたお餅だとか特製の味噌パンも特別注文で菓子屋に作らせた。平成の現代にも味噌パンがあるが、特許はあるいは我が山岳部にあるかもしれない。味噌パンの元祖というところだろうか。

わが部でラーメンを使うようになったのにはこんな話がある。山小屋の仕事で遠見小屋に居た仲間が、二階に泊めたある山岳部の人達がひっくり返したなべの汁をあびた。それでラーメンを使うことを知った。乾麺は温かい食べ物、簡単にできるということで、早朝の行動や軽食ということによく使うようになった。

味噌の扱いと生肉がどうにかならないかということで、当時もっとも安価なくじらの肉を味噌漬けにすることを考えた。そのために肉を使うことができるようになり、味噌はそのまま味噌汁に使った。しかし、剣岳から黒部谷に下り白馬へ登り上げるときは、ところかまわず個別に特別行動をとらねばならない激しい下痢に見舞われた。キジを打つとかお花を摘むというような詩的な世界ではなかった。

確かに貧しい食事であったかもしれないし、炊事は事実大変であったが、楽しい思い出である。たき火を囲んでの語り合いや歌をうたったこともなつかしい。雨降りのエッセン当番はつらかったが、夜明けの景色の美しさを味わうのも、新人がゆったりした気持ちで過ごせた時でもあった。

(柳沢勝輔)

## 女子部の山行

昭和29年頃から山岳部に三浦文子・柳沢澄子ら女子部員が入り始め、30年度には、宮本幸子・河口歌子・高山澄子ら数人が入部し、31年度宮下常子、32年度宮本範子、中村和美、大塚寿子たちと女子部員が毎年増えていった。山行は男子部員とほとんど一緒に行っていた。女子だけの山行をしたいという機運が出てきたのは32年度だった。夏山、秋山やスキーは行動をともにしたが、積雪期の新人合宿・春山・冬山は、別行動が多くなった。女子の新人歓迎合宿は、男子部員の引率で戸隠縦走であり、「私たちもあの美しい雪の常念岳に登りたい。」という強い思いがあった。女子は体力面のハンディもあり、二年制の人気が多かったことも原因になっていたかもしれない。

32年度、河口が3年、宮下2年、宮本・中村・大塚が一年のとき、L吉沢健・小林盛男、清水悟朗部長たちに粘り強く掛け合って、夏山合宿で、白馬から穂高まで北アルプス全山縦走をする男子パーティに、女子だけで針の木小屋まで入って合流したのが、最初の女子

の山行だった。清水部長と京都大学に行った饗場さんが同行したが、リーダー河口、宮下・宮本・中村が計画、係分担などをした。雨のため、本隊の到着が一週間近く遅れて野菜がなくなり、アザミの葉の味噌汁などで凌いでいた。この年の秋山は男子部員と涸沢に、冬山は男子の合宿後、宮下と宮本が久保田さんに遠見尾根で幕営生活、雪中行動の訓練をしてもらった。

昭和33年に津金周子・原伸子・栗林紀子が入部して、女子部員が一年から四年まで揃った。新人歓迎合宿は常念岳、夏山は剣岳～立山～五色が原～針の木の縦走、秋山は涸沢に入って穂高連峰に登り、冬山・春山は八方尾根から唐松岳をアタックした。それまで女子部員は特別扱い的な面もあり、男子部員に比べて甘やかされていたことも事実で、初めて女子部員だけで行動してみると体力不足、実力不足を痛感した。小林リーダーや男子部員の力添えもあって、試行錯誤しながらも事故もなく計画のすべてが実現できたことは、自立へのワンステップになった。

昭和34年度は、片岡八千代、児島昌子が入部し新人合宿は男子と一緒に八ヶ岳へ、夏山は、4月就職した宮本が加わり女子だけで燕～表銀～槍を縦走し、穂高には宮下・大塚も入って定着合宿し、女子部の活動も軌道に乗ったかと思われた。10月1日からの秋山合宿を目前にした9月30日、前途を期待されていた津金週子さんが突然薬を飲んで他界した。一年半、同じ夢に向かって苦楽をともにし、信頼できる友情を築き上げてきたつもりだった。少数の部員で多くの合宿を遂行することは個人に対するプレッシャーも大きく、今までの女子部の在り方が問われて皆で悩み抜いた末、「彼女の分も生きよう、彼女の分も山に登ろう、信頼できる友情を育てなければならない。」と決心した。この年の冬山は、中村・宮本・大塚・栗林の4人で中の湯から西穂高岳へ、春山は男子部員と一緒に横尾尾根から槍ヶ岳の合宿に入った。

35年度は、松橋容子が入部したが、女子部員が減少で独自の活動が困難になり、男子部員と行動をともにすることが多かった。それでも夏山は栗林と松橋で、白馬～五竜への縦走をした。秋山は男子と合流して穂高、冬、春山も一緒に合宿に入った。

36年度、中村元子、風間松美、井原雅子らが入部し、再び女子だけの合宿ができるようになり、栗林がリーダーで松橋、中村、井原など3～4名で、夏山は、剣岳～針の木縦走、秋山は五竜～針の木縦走、冬山は下倉がついて遠見尾根～五竜岳アタックと少数精鋭の合宿ができた。

37年度に荒井多美子、川本美千代、玉井雅子、中村順子、中村陸奥が入り、夏山は松橋リーダー総勢7名で槍～三俣蓮華～剣岳を、冬山は積雪期の八方尾根から唐松岳、春山は

梅池～白馬岳の縦走をするようになった。

女子部の山行の変遷を振り返ってみると、戦後、女子の大学進学者が多くなり、男子と同じように活動する場が拡大されてきたが、登山に於いても、男子部員と同じように力を付けて、自立した登山をより困難を求めてみたいという欲求が実現されてきたのだと感じる。女子部の記録は、ささやかな記録ではあるけれども、自分たちで計画し行動できたことは、その後の人生を生きていく原動力にもなっていると思う。



雪道をゆく -33年春山より-

(宮下常子)

### 1959年度（昭和34年度）

#### ○新人歓迎山行（八ヶ岳 天狗岳～権現岳縦走）

・期日 5月3日～5日

・参加者 L片岡格 S L中沢俊夫 S L祢津直行 装備係長町田金四郎 同係若狭一  
男 食糧係長大西道夫 同係大井篤 隊員新名一英 原昭恵 大塚許好 藤  
井国久 西沢喜由 坂口武久 中村和夫 中村和美 大塚寿子 津金周子  
栗林紀子 柳沢勝輔

#### ・行動記録

5月3日 晴 長野発 5:55→稻子湯発 11:20→中山峠→黒百合平着 2:35キャン  
プ グリセード等雪上練習

5月4日 晴 強風 黒百合平発 7:40→天狗岳→夏沢峠→硫黄岳→横岳→赤岳→キ  
レット着 4:45キャンプ 雪上練習

5月5日 濃霧（視界20m）強風 キレット発6:55→権現岳→三ツ頭→甲斐大泉駅  
着1:15→長野着 8:33解散

費用 合宿費1人200円 バス代 小海～稻子湯100円 汽車賃 個人持

参加人数20名という隊は大変なもので、稻子湯からの軌道敷を行く状況は、当時信越本線を走っていた貨物列車のようであった。後方が右方向に向かって歩いているとき、先頭のほうはすでに左方向に折れているというふうで、尾根道を直登する部分では先頭と後方との声が届かず、連絡ができない場面もあった。それでも新人部員が大勢加わったことがうれしかった。

雪はかなり少なく、雪上訓練が十分にできなかった。逆に2日目から強風に見舞われ、赤岳周辺は濃霧で、新人たちに恐怖を与えていた。キレットのキャンプでは5張のテントが4張も風で吹きはがされ、一晩中テントを体に巻きつけてツェルト暮らしの様であった。翌朝も強風が続き、権現岳の登りは氷粒や砂の石つぶてが顔面に叩き付け、痛い程だった。権現岳を越えると春の日ざしが暖かく、まさに極楽という感じであった。

#### ○夏山山行合宿（北アルプス裏銀座・後立山縦走）

期日 7月25日～8月7日

参加者 L.蒔田修 S.L.丸山孝 栎津直行 食糧係長中沢俊夫 装備係長町田金四郎  
隊員柳沢勝輔 大西道夫 若狭一男 新名一英 尾形誠也 山口秀二 中村和  
夫 西沢喜由 坂口武久 原昭恵

#### 行動記録

7月25日 曇後晴 長野→上高地→横尾キャンプ

7月26日 晴 横尾→涸沢→北穂高岳南稜 ファリア登山で遭難した塚田素嗣君の追  
悼を南稜で行った。→横尾→二の俣キャンプ

7月27日 晴 二ノ俣→槍ヶ岳→西鎌末端キャンプ 食欲のない者数名 槍の方で女  
子部に会う。

7月28日 晴 西鎌末端→双六小屋・三俣の中間キャンプ 疲労気味の者多く、休養  
のため早いキャンプとなった。雪渓で雪上訓練

7月29日 晴 キャンプ→三俣蓮華→鶯羽→赤岳キャンプ 新名に栎津が付き添って  
下山した。

7月30日 晴 赤岳→野口五郎岳→烏帽子岳キャンプ 日照り続きで全員バテ気味な  
るも、次第に調子をとりもどしつつある。

7月31日 晴 烏帽子→南沢岳→船窪小屋付近キャンプ 疲労気味。足、肩、背の傷が痛む。

8月1日 晴 休養のため停滞。朝食抜きで本日は2食。原に柳沢が付き添って下山した。

8月2日 快晴 船窪小屋→蓮華→針ノ木小屋付近キャンプ 吉沢先輩が昨日から来ていることを知る。4:20に会う。祢津、柳沢2:50に再び入山合流した。

8月3日 快晴 暑い 針ノ木→赤沢→種池 ルートが整備され快調

8月4日 快晴 朝雲海 種池→冷池→鹿島槍吊り尾根10:45着 キャンプ くじらのスキヤキ

8月5日 晴 午後ガス発生 鹿島槍→八峰キレット→五竜→唐松小屋付近キャンプ パン3枚の昼食はきつい。尾形足の豆で不調なるも奮闘す。遠見尾根下山を変更して白馬岳へ向かう。

8月6日 晴 唐松小屋→不帰→白馬鎧→白馬→白馬大池キャンプ パン4枚とする。湖畔のキャンプは快適。夕食にカンパの品がいっぱい出る。キャンプ代1人10円とられる。

8月7日 晴 白馬大池→梅池→鐘の鳴る丘→白馬大池駅12:00着→松本→長野19:06着 解散

#### ・合宿概況と概評

夏山合宿前のファリア登山は申し込みが多く、20名を超える隊を3個隊つくった。登山ブームと呼ばれる頃で、我が山岳部も部員30名を要し、山岳部内にも一つの過信があったのかもしれない。残雪の多い北穂高岳南稜で、ファリア第2回隊が遭難を起こした。塚田素嗣君が南稜中央部の雪渓で滑落、死亡した。

この合宿は塚田君の追悼登山となり、安全登山を改めて確認すべき山行となった。合宿も当初は白馬岳→剣岳→穂高岳という遠大な横断縦走であったが、計画を大幅に変更し、ロッククライミングも自粛して槍ヶ岳から白馬大池までの縦走となった。

合宿は晴天が続き雨降りは一日もなかった。そのため停滞は一日のみ。合宿初日から調子をくずす者が多く、今後のトレーニングの工夫が課題となった。全体にバテ気味で水不足を痛感した。水筒の数量をふやす。早朝出発はよく、キャンプ地に着くのが早かった。2日目まで30分行動、5分休憩のピッチ。3日目から50分-10分ピッチ。幕営地については一昨年の白馬～穂高の縦走経験者が多く、比較的よいキャンプ地を

選ぶことができた。

### ○秋山山行合宿（北アルプス穂高岳奥又白池定着、前穂東面）

期日 10月 1日～7日

参加者 L片岡格 S L祢津直行 S L中沢俊夫 新名一英 中村和夫 蒔田修 百瀬斐敏監督夫妻（山田、宮下、安藤）

#### 行動記録

10月 1日 長野→松本→上高地→松高尾根取付

10月 2日 雨 松高尾根取付→奥又白池

10月 3日 晴曇後雨

A隊（片岡、新名、中村、百瀬夫人）北尾根縦走、前穂より明神主峰往復

A沢入口で百瀬監督合流

B隊（中沢、祢津）4峰明大ルート 池B C発7：10→取付点発8：20→  
4峰頂上10：00→前穂経由池着13：00

10月 4日 雨 停滯 百瀬監督夫妻下山

10月 5日 曇後晴

A隊（片岡、中沢）BAface B隊（祢津、中村）ABface C隊（新名、  
山田）北壁Aface

10月 6日 曇

A隊（片岡、山田）新村ルート

B隊（祢津、蒔田、中沢、中村）北壁Aface 北尾根縦走

C隊（新名、宮下、安藤）BAface 奥穂往復

10月 7日 雨 池B C→上高地→松本→長野

### ○冬山山行合宿（北アルプス横尾尾根～槍ヶ岳、北穂高岳）

この合宿は春山の横尾尾根から奥穂高岳の偵察もかねて行われたものである。リーダーは蒔田修であり参加者の幾人かもわかつてはいるが、記録が見つからない。そのために全体の動きを記すことができないので、わかっている部分もあるが詳細は省くことにした。天候の合間をぬって、第1目標の槍ヶ岳の外に第2目標の北穂高岳まで登頂することができた。しかし、冬山の短い期間を考えればやや欲張った感もあり反省させられた。一方春山に対しては、十分なプランを立てる一助になったと思われる。



冬山合宿より



槍ヶ岳にて

### ○春山山行合宿（北アルプス横尾根より奥穂高岳）

・期日 女子隊 3月8日～3月18日

先発隊 3月11日～3月19日

本 隊 3月16日～4月5日

・参加者 17名

本 隊 L 蒔田修 S L 丸山孝 S L 片岡格 新名一夫 斎田金四郎 大西道夫 中村和夫 中沢俊夫

先発隊 L 小林盛男 柳沢勝輔 宮島卓浪

女子隊 L 中村和美 大塚寿子 栗林紀子 宮下常子 大森晋 中田邦夫

#### 行動記録

3月8日 女子隊 長野→松本→釜トンネル

3月9日 女子隊 釜トンネル→横尾

3月10日 女子隊 横尾→横尾岩小屋付近B C設営

3月11日 女子隊 停滞。先発隊 長野→松本

3月12日 (大森、中村、大塚) B C→横尾尾根P V付近C 1設営 (宮下、中田、栗林) B C→C 1→B C (小林、柳沢、宮島) 松本→上高地ビバーク  
積雪多く、軟らかく歩行困難。

3月13日 (中田) 下山。(宮下、栗林) B C→C 1 (小林、柳沢、宮島) 上高地→B C 梓川は積雪多く、その上地吹雪で凍える。

3月14日 (大森、宮下) C 1→天狗原→稜線→C 1→B C (大塚、栗林) C 1→天狗原→C 1 (小林、柳沢、宮島) B C→C 1 テント2号設営

3月15日 (大森、宮下) 下山。(小林、中村) C 1→天狗原→槍ヶ岳頂上→天狗原

C 2 (柳沢、宮島、栗林) C 1 → 天狗原に C 2 を設営 → 穂線 → C 2 → C 1

3月16日 本隊 6名 長野 → 松本 → 釜トンネル キャンプ C 1 C 2 は停滞

3月17日 本隊 3名 釜トンネル → BC → 釜トンネル 3名 釜トンネル → 沢渡 → 釜  
トンネル (柳沢、宮島) C 1 → 穂線 → 槍が岳頂上 → C 1 → BC (小林、  
中村) C 2 → BC (大塚、栗林) C 1 → BC

3月18日 本隊 釜トンネル → BC (柳沢、宮島、中村、大塚、栗林) BC → 上高  
地 → 下山 (小林) BC → 上高地で本隊に合流 → BC

3月19日 (大西、丸山) BC → C 1 → C 2 (蒔田、新名) BC → C 1 → C 2 BC  
(片岡、中村) BC → 上高地 → BC (小林) BC → 上高地下山 (町田、  
中沢) 長野 → 松本釜トンネル

3月20日 (丸山、大西) C 2 → C 1 → C 2 (3名) BC → C 1 → C 2 → BC  
(町田、中沢) 釜トンネル → BC

3月21日 停滞

3月22日 (片岡、新名、中村) BC → C 1 → C 2 → BC (中沢、町田) BC → C  
1 → C 2

3月23日 (片岡、新名) BC → C 2 (丸山、町田、中沢) C 2 → 南岳直下 C 3 →  
設営 → C 2

3月24日 停滞

3月25日 (丸山、中沢、町田、新名) C 2 → C 3 (片岡) C 2 → C 3 → C 2 → C 1  
→ C 2 (蒔田、中村) BC → C 1 → C 2

3月26日 停滞

3月27日 停滞

3月28日 C 2 は停滞 (丸山、中沢、町田、新名) C 3 → 北穂 C 4 → C 3

3月29日 (小林) 長野 → 上高地 → BC (蒔田、中村) C 2 → C 3 (中沢) C 3  
→ C 2 → C 4 (町田) C 3 → C 2 → C 3 (新名、丸山) C 3 → C 4  
(片岡) C 2 → C 3 → C 4

3月30日 (中沢、新名、丸山、片岡) C 4 → 奥穂高岳 → C 4

3月31日 (小林) BC → C 1 → C 2 → C 1 → BC 上部は停滞

4月1日 停滞

4月2日 C 4 撤収 → C 2 C 3 撤収 → C 2

4月3日 C 2 撤収 → BC

4月4日 BC 撤収 → 上高地解散 → 下山 小林、片岡 上高地キャンプ (5日西穂 →  
涸沢 → 横尾) (柳沢 勝輔 記)

### ○女子部 夏山合宿

- ・目的 部員の体力養成 女子パーティー第2年目の行動を樹立する。

- ・構成員 L 中村和美 S L 宮本範子 津金周子 栗林紀子 後発 宮下常子 大塚寿子
- ・行動日程

7月25日（第1日）長野 6:15 ————— 汽車 明科 8:00 ————— 中房 10:00 …… 合戦小屋  
Camp

7月26日（第2日）合戦小屋Camp 6:00 …… 燕山荘 …… 西岳

7月27日（第3日）西岳Camp 6:00 …… 槍ヶ岳 …… 南岳

7月28日（第4日）南岳 …… キレット偵察

7月29日（第5日）南岳 …… 槍沢 …… 横尾

7月30日（第6日）横尾～蝶ヶ岳 長野 ————— 汽車 松本 ————— 上高地 …… 横尾（後発）

7月31日（第7日）横尾 …… 涵沢

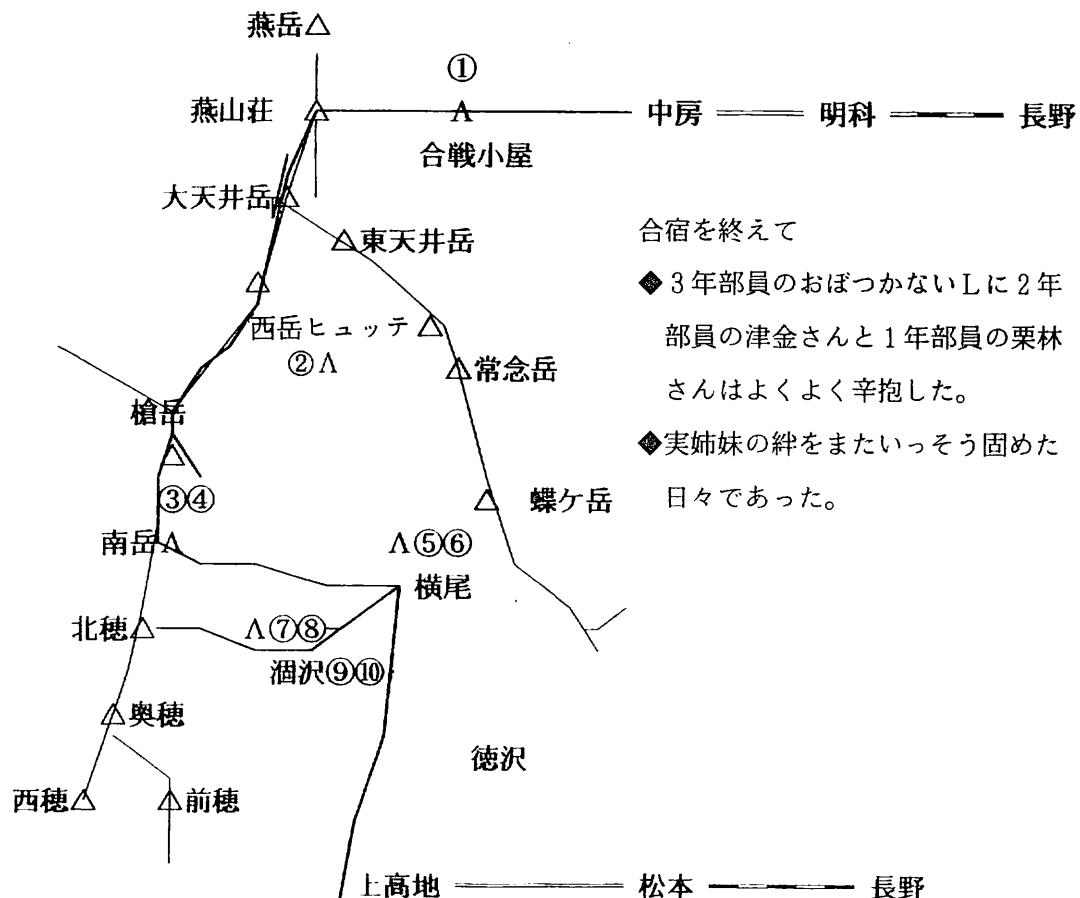
8月1日（第8日）東穂（涵沢 …… 北穂）

8月2日（第9日）ジャンダルム

8月3日（第10日）前穂 北尾根（男子部員のサポートによって）

8月4日（第11日）涵沢 …… 横尾 …… 上高地 ————— 松本 ————— 長野

- ・費用 合宿費 1,000円 交通費 750円



## ○秋山合宿 女子パーティー

穂高涸沢合宿は実施直前の津金周子さん逝去によって中止。

## ○冬山合宿 女子パーティー

- ・西穂高合宿 記録紛失につき詳細不明
- ・行程 中の湯 —— 上高地 —— 西穂高
- ・参加者 中村和美 宮本範子 大塚寿子 栗林紀子

## ○春山合宿 女子パーティー

横尾－槍ヶ岳 記録紛失につき詳細不明

- ・行程 中の湯 —— 上高地 —— 横尾尾根 —— 槍ヶ岳
- ・参加者 中村和美 宮本範子 大塚寿子 栗林紀子

(中村 和美 記)

## 新人育成と監督制度の制定

### 歴代の監督

昭和33年2月から実施に移された「信州大学長野山岳部、部規約」には第二章機構の第四条に「本部は部長、顧問を置き、リーダー、サブリーダー、マネージャー、装備、食料の各係より成る。」とあり、いまだ監督制度には触れていない。

その後の部の発展と部員数の増加、とりわけ新入部員の増加に伴い、その新人の養成をO Bにまかせ、併せて次第に数を増やして来ていたO B会との連携を深めることをねらいとして、昭和34年（1959年）から監督を置くことにし、その初代監督に百瀬斐敏氏が当たることになった。

以下歴代の監督と在任期間を示すと次のようである。（敬称 略）

昭和34年（1959年）百瀬 斐敏

昭和35年（1960年）吉沢 健～

昭和37年（1962年）

昭和41年（1966年）百瀬 斐敏～

昭和41年（1966年）から再度百瀬さんが監督を引き受けられたことは確かであるが、

その後何年までその任に当たられたか、またその後誰が引き継いだのか、はっきりしない。記憶をたどって、祢津直行さんが就かれたのではないかと思い、電話でお尋ねしたが、信稟OB会事務局は担当したことがあるが、監督には就いていないとのこと、残念ながらいつこの制度が立ち消えになったのか、わからずじまいのままである。

この監督制度が発足したきっかけは、前にも記した昭和33年に定めた部規約によると思われる。この部規約は「草案」を作り、先輩各位に送ってご意見を徴した、その前文を参考までに次に記す。

#### 拝啓

(前略) 部の方も今年は新入部員も多くなり、部の運営にも、あるいは対外的にも何か一つもとになる規約もなければと痛感するに至り、夏山合宿後から三・四年生の間で話し合いが進められてまいりましたが、ここによくその草案ができ上りました。

このようなことに慣れない我々がなした事ですので、欠点も多く、技術的にも、内容的にも欠陥があると思いますので、先輩各位の御批判をお聞きしようと思い、お送りする次第です。

OB会なるものについてみましても、未だ発足しているわけではありませんが、このような会もありやる面でなければと考え、近い将来に発足することを想定して規約草案の中に取り入れてみました。

その他いろいろ問題になる事もあるかと思いますので、プリント下部の余白欄にお気づきになった事を書いて、お手数ながら本年中に長野市妻科信大あけぼの寮吉沢健宛、お送り下さるようお願い致します。右お願い方々。

#### 先輩各位殿

先輩から送付されたものや気づいたことをまとめた当時の書き込みの記録に「監督：OBの互選」とある。

(吉沢 健)

## 1960年度（昭和35年度）

### ○新人歓迎合宿 第1回合同合宿

期 日 4月29日（金）～5月5日（木）（女子 4月29日・金～5月3日・火）

場 所 上高地をB Cにして西穂高・前穂高・奥穂高・霞沢・蝶・大滝

参 加 初めてオール信大で実施

長野 25名 松本 31名 農学部 6名 繊維 7名 計72名

構 成 S L 蒔田 修 S L 大西 道夫・新名 一英

若狭一男・中村和夫・尾形誠也・大井 篤・加藤 晋・山口秀二・片岡 格・

越田 寛・三石 広・小穴自成・柳沢正一・上杉信之・峯村吉泰・新井陽一郎・

下倉邦夫・栗林紀子・松橋容子・小島淑江・小林盛男・小野義郎・戸沢義久・

宮島卓郎

### 行程

#### ・4月29日（金）快晴後曇り

6：00松本発 貸し切りバス 7：00島々宿着 10名のパーティー6班に別れて徳本峠越えをする。2：30～3：30徳本峠着 5：20～6：00上高地小梨平B Cにつく。ジープ組は上高地に乗り込みB C設営に当たる。

#### ・4月30日（土）曇り後小雪

##### ・奥明神沢－前穂高－奥又白班 L川村

7：15 B C発－8：50 岳沢小屋－10：50 穂高線着－11：50

前穂高P着 1：15－奥又の池 松高ルンゼー 3：15 養魚場着

3：55 B C着

##### ・天狗沢－西穂高班 L蒔田

7：15 B C発－9：15 天狗沢コル－12：30 西穂高頂上 着

##### ・コブ尾根班 L伊藤

7：20発－9：15 尾根下－12：30 穂高線－1：30 天狗のコル

##### ・西穂高班 L蟹江

7：10発－9：15 西穂高小屋－12：10～12：20 独標第一ピーク

1：15 西穂高頂上－2：35 西穂高沢－4：00 B C着

##### ・天狗沢－コブ頭 L坂本

7：30発－8：15 岳沢－10：30 天狗ノコル－12：30 コブの頭

13：30 天狗ノコル－15：30 B C着

- ・霞沢岳班 L茅野  
7:15発-12:00 ピーク手前のコル-12:30 昼食 下山-2:45 BC着
- ・5月1日(日) 曇り
  - ・奥明神沢-前穂高-奥又白 L安藤
  - ・天狗沢-西穂高岳 L片岡
  - ・霞沢岳 L川村
- ・5月2日(月) 雨 停滞
- ・5月3日(火) 快晴
 

・天狗沢-奥穂高 L蒔田	・コブ尾根 L蟹江
・畳岩尾根 L片岡	・西穂高沢 L新名 L坂本
・奥明神沢-奥又白 L大野	・天狗沢 L大井 L佐藤
- ・5月4日(火) 曇り
 

・六百山 L片岡	・南稜-奥穂高-前穂高-奥明神沢 L茅野
・奥明神沢-奥又白 L蟹江	・西穂高-天狗岳 L大西
・コブ尾根 L川村	

#### ○夏山合宿

期日 7月15日～8月2日

場所 北アルプス常念-槍ヶ岳-立山-剣岳縦走

参加 CL大西道夫(病気にて途中下山) CL祢津直行 丸山孝 柳沢勝輔 片岡格  
 三石絃 柳沢正一 上杉信之 下倉邦夫 小穴自成 峯村吉泰 星野安男  
 井原睦雄 新井陽一郎 計14名

#### 行程

- ・7月15日(金) 長野-一ノ沢 曇り  
6:15長野発 9:45柏矢町-10:45島川橋-4:50一ノ沢
- ・7月16日(土) 一ノ沢-常念乗越 晴れ  
6:45出発-10:45一ノ沢上流-3:55常念乗越
- ・7月17日(日) 常念乗越-西岳 晴れ  
6:00出発-10:06大天井岳山腹-4:35第一沢-5:20第二沢西岳小屋
- ・7月18日(月) 西岳-殺生小屋 晴れ  
6:10出発-10:00ヒュッテ大槍-12:00殺生小屋キャンプ-1:30  
槍頂上(大西病気にて下山 以後CL祢津)
- ・7月19日(火) 槍ヶ岳-三俣 レンゲ小屋 晴れ

- 6 : 25出発 - 7 : 05槍の肩 - 9 : 35縦沢岳 - 2 : 12双六小屋 - 3 : 45三俣レンゲ小屋
- 7月20日（水） 三俣レンゲ小屋 - 黒部五郎 晴れ
 

5 : 38出発 - 6:25三俣レンゲ岳頂上 - 8 : 25黒部五郎コル - 1 : 10黒部五郎岳 -  
2 : 45黒部五郎・太郎山コル
  - 7月21日（木） 黒部五郎 - 薬師岳 晴れ
 

5 : 10出発 - 7 : 15北ノ俣 - 9 : 20太郎兵衛平 - 12 : 25薬師岳中腹  
1 : 40薬師岳頂上 - 2 : 30雪上訓練
  - 7月22日（金） 薬師岳 - 越中沢 晴れ
 

5 : 40出発 7 : 15薬師岳頂上 - 11 : 50スゴ小屋 - 2 : 00 越中沢
  - 7月23日（土） 越中沢 - 獅子岳 晴れ
 

6:00出発 - 6:55越中沢岳中腹 - 9 : 45五味ヶ原 - 11 : 35ザラ峠 - 1 : 00獅子岳
  - 7月24日（日） 獅子岳
 

• 7月24日（日） 獅子岳 - 一ノ越 - 雄山 - 真砂岳中腹 - 真砂平B C

4 : 55出発 - 6 : 48一ノ越 7 : 45雄山 - 8 : 50真砂岳中腹 - 9 : 43別山 -  
11 : 50剣沢小屋 12 : 50剣沢雪渓 - 1 : 20真砂平口B C設営
  - 7月25日（月） 剣岳定着合宿 晴れ後雨
 

②八ツ峰上半 五・六コルよりニードル - 剣 - 平蔵下る
  - 7月26日（火） 剑定着合宿 雨後曇り
 

④六峰Aコース ⑤六峰Aフェーズ - 中大ルート
  - 7月27日（水） 剑岳定着合宿 曇り後雨
 

長次郎谷にて雪上訓練
  - 7月28日（木） 剑岳定着合宿 曇り後雨
 

④チンネ中央ルート ⑥源次郎尾根 - 剣P - 平蔵下る
  - 7月29日（金） 剑岳定着合宿 濃霧時々雨
 

④チンネ ⑤八ツ峰上半 - ニードル - 長次郎谷下る ⑥源次郎尾根 - 剑P - 平蔵下る
  - 7月30日（土） 剑定着合宿 晴れ
 

④八ツ峰上半 - ニードル - クライミング - 長次郎谷下る
  - 7月31日（日） 剑定着合宿 晴れ
 

④チンネ日嶺ルート ⑤六峰Cフェース - 剑稜ルート

- 7月31日（日）剣定着合宿 曇り
    - ②六峰A C フェース ③チンネ右方山稜ルート
    - ⑤六峰B D フェース ⑥三ノ窓の雪渓より長次郎谷下る
  - 8月1日（月）BC撤収－千寿ヶ原 晴れ
    - 5：50出発－6：40平蔵谷出会い－7：30剣小屋 8：20剣御膳
    - 8：40雷鳥沢－10：40美松荘－11：15弥陀ヶ原－3：35美女平ケーブル－
    - 4：25千寿ヶ原
  - 8月2日（火）千寿ヶ原－富山－長野
    - 6：30出発－7：04立山駅発富山行き－富山駅にて解散
- 岩登り強化合宿
- 期日 9月3日～4日
- 場所 大峯山の物見の岩
- 参加 L 蒔田修 3年部員以下全員強制参加（含む女子部員）4年部員は指導に当たる
- 内容 1年部員 ロープワーク・ザイルの安全確保・アップザイレン・登攀記録の作成
- 2年部員 三ツ道具のマスター・吊り上げ登攀及びアブミ使用によるオーバオーハング・乗越し・下降技術の習得・ルート図の作成
- 3年部員 高度な人工登攀・ルートファイティング・新ルート開拓・下降技術・ルート図の作成
- 4年部員 3年生以下部員の指導・確保法の研究・アイゼン、ミトンをつけての登攀

- 秋山合宿
- 期日 10月1日～7日
- 場所 北アルプス涸沢を中心とした尾根歩きとロッククライミング
- 参加 L 新名一英 S L 小穴自成 中沢俊夫 大西道夫 若狭一男 加藤晋 山口秀二  
尾形誠也 中村和夫 峰村吉泰 下倉邦夫 柳沢正一 星野安男 井原睦雄  
栗林紀子 松橋容子 小林盛男 宮下常子 宮本範子

#### 行程

- 10月1日（土）曇り
  - 6：18長野発－8：20松本着－8：45松本発－11：45上高地着
  - 12：40発－1：30明神館－2：25徳沢園－4：05横尾 キャンプ
- 10月2日（日）晴れ
  - 9：03出発－12：52～1：10涸沢着－BC設営

・10月3日(月) 晴れ

新名班 五・六のコルー四峰－前穂高－奥穂高－ジャンダルム－穂高小屋－B C

中沢班 南東陵－北穂高小屋－第二尾根－南峰頭－涸沢岳－奥穂高岳－ジャンダルム  
奥穂高岳－穂高小屋－薪取り－B C

加藤班 東陵－南陵コルー水野クラック－南峰－穂高小屋－B C

・10月4日(火) 晴れ

小穴班 五・六のコルから前穂高 つり尾根 奥穂高 穂高小屋 B C

新名班 東陵 北穂高小屋 P 1・P 2 南峰 穂高小屋 B C

中沢班 東陵 北穂高小屋 第2尾根P 1 C沢左右出会 ニゼガリ ドーム B C

・10月5日(水) 晴れ

新名班 五・六のコルートラバース－奥又白池－A沢－前穂高－北尾根下る－B C

中村班 塚田君の墓－松濤岩－第2尾根P 2－水野クラック－松濤岩－B C

宮下班 南陵－松濤岩－北山陵－水野クラック－松濤岩－南陵リッジ－B C

・10月6日(木) 晴れ

尾形班 五・六のコール六峰P－七峰－八峰－屏風岩P－八峰コル－薪拾い－B C

中村班 塚田君の墓－松濤岩－第2尾根－松濤岩－B C

中沢班 南陵－松濤岩－C沢左俣－スノーコル－Aカンテ－Cカンテ－Dカンテ

宮下班 ザイ濤テン－奥穂高小屋－飛騨尾根－ジャンダルム－穂高小屋－B C

・10月7日(金) 雨のため停滯

・10月8日(土) 晴れ

大西班牙 第2尾根登攀－滝谷第2尾根－ザイティングラードを下る。

山口班 五・六のコル－奥又白池－前穂高－五・六のコル－B C

中村班 穂高小屋－奥穂高－

ジャンダルム－穂

高小屋－B C

栗林班 東陵－北穂高－涸

沢岳－穂高小屋－

B C

小林班 五・六のコル－前

穂高－奥穂高－北

穂高－B C



1960.10. 秋山合宿

・10月9日（日）晴れ

5：00 BC撤収 6：45涸沢発－8：15横尾－9：35徳沢園－12：00上高地－  
3：00島々－3：35松本5：27発－7：05長野着

○冬山合宿

期日 12月26日～61年1月5日

場所 北アルプス北尾根より前穂高岳 極地法

参加 L小林盛男 S L中沢俊夫・片岡格

大西道夫・新名一英・宮島卓浪・小野義郎・戸沢義久・小穴自成・中村和夫・  
栗林紀子・下倉邦夫・柳沢勝輔・井原睦雄・松橋容子・峯村吉泰・新井陽一郎・  
星野安男 O B 吉沢健 宮本範子

行程

・12月25日

松本文理学部至誠寮泊まり。畳の大広間にラジュウスの響きが心地よい。それを囲んだ16人、装備の手入れに心も弾む。加藤さんがお手伝い。

・12月26日 晴れ—曇り—小雪

5：00起床 6：00朝食 6：30寮発－7：20松本駅発－8：15島々発－  
9：30湯川渡－2：30建設省飯場 5：30夕食 7：30就寝

島々からバスに揺られて湯川渡間で130円。ここから二班に別れて分散行動。平均荷重は10.5貫（約40kg）ザックは重たいけれど山では雪が待っている。マケルナ、バテルナもう一息だ。釜の隧道を一気に抜けて、貨物列車のようにうねりは続く。姿はぼろでも心は綿、靴の底で雪がなる。全員快調、好調な出だし。飯場の居住性は極上々。積雪40cm

・12月27日 小雪

4：30起床 5：30朝食 先発隊 6：30後発隊 7：30出発－12：25BC  
3：30デポ地点－4：45BC 8：30就寝

梓川原のラッセルふかく、旧道を行く。BCは新村橋より10分の地点。梓川右岸の樹間にあり。BC着後偵察とボッカ。慶応尾根の取り付きでは積雪多く1m位。寒さが身に沁みる。薪ふんだんにあり。たき火が可能。

・12月28日 雪

4：20起床 5：30朝食 第1隊偵察 6：00出発－第2隊C1設営 7：00出発  
第3隊ボッカ 8：15出発

雪多くラッセルワーク困難を極める。稜線より中央大学のルートあり。雪崩の危険も

あり、慶応尾根への取り付きは要注意。予定通り C 1 設営。12人用のカマボコウインパー。積雪 2 m 位。

・12月29日 雪

B C 5 : 00起床 6 : 00朝食 7 : 05 B C 出発 - 11 : 15 C 1 着

C 1 4:15 起床 5 : 00朝食 7 : 40 C 1 出発 - 12 : 40 C 2 予定地着

C 2 建設隊の平均荷重役20kg 風雪をおしての強行軍。視界最大100m、最小8 m。要所要所にザイルをフィックスする。C 2 設営12 : 40～2 : 00

・12月30日 雪

C 2 ……気温 -21°C 停滞

C 1 ……気温 -20°C 停滞

B C ……気温 -14°C C 1 に 3 名向かうも雪崩の心配ありて途中に荷物をデポ、B C に引き返す。

・12月31日 雪

C 2 停滞 C 1 停滞 B C - C 1 へ

荒れ出した天候は回復の見通し立たず。大雪注意報が出ている。C 2 の連絡とれず。

・1月1日 晴れ後曇り

きらきら輝く北尾根。すそに流れる広大なカール。久しぶりの快晴

C 2 今日より片岡・大西の 2 部員が加わり 6 名となる。アタック体制整う。

C 2 ①10 : 30 C 2 発 - 2 : 00 たぬき岩 - 2 : 15 六峰頂上 - 4 : 30 C 2

②8 : 30 C 2 発 - 11 : 00 八峰頂上 - 11 : 30 C 1 着

12 : 55 C 1 発 - 1 : 45 七峰頂上 - 2 : 35 C 2 着

・1月2日 雪 - 曇り - 雪 地吹雪き激し

4 : 00起床 4 : 30朝食 4 : 30～6 : 00待機 7 : 00出発

ザイルパーティ - ①小穴・中村 サポート隊 ②片岡・中沢 サポート隊

③大西・新名 アタック隊

10 : 00 5・6 のコルにて①②のサポート隊は引き返す。11 : 50 C 2 着アタック隊は続けて五峰に向かう。

六峰五峰の登りは雪が非常に多く、所々に雪崩の跡がある。途中何か所かザイルをフィックスする。風が非常に強く雪煙で視界がさえぎられる。2 : 30 五峰の頂上着。

平坦な場所は全くなく、かろうじて 2 人用のツェルトを張る場所を作り、ピッケルを支柱にしてツェルトを張り、ザイルで岩にフィックスする。風が強くツェルトをあおり火

器が使えず。気温低く、吐く息が凍って霜となり、顔に降りかかって、風の音と重なって眠れず。靴を凍らさないように抱えて夜明けを待つ。松本平の灯美くし。

• 1月3日 晴れ—曇り—雪 ←風激し -20°C

4:00起床 5:00朝食 出発準備 7:20出発 コンテニアスで四峰を登る。途中雪崩跡あり。雪面はクラスト。アブミ必要箇所あり。9:00 7ピッチ目で四峰頂上着。三・四のコルにて9:10~9:30昭和山岳会の3人を待つ。チムニーでルートファインディングに失敗し手間取る。チムニー内の雪を切り崩すに手間取る。バックアンドニードせり上がる。トンネルを抜けると雪は少なくその代わり風が益々強く、バランスが難しい。コンテニアスで三峰・二峰を越え、12:00前穂高岳の頂上に立つ。視界悪く、周囲の山が見えず。12:05頂上発 1:00 7ピッチ目でチムニーの上に着き、アップザイレンで下る。2:20四峰中腹にて、吉沢OB・中沢・小穴・宮島の出迎えを受ける4:20C2着

• 1月4日 雪まじりの雨 C1・C2ともに雪

C1よりザイルフィックスをはずしに柳沢・片岡C2へ

C2 6:50起床 7:20朝食 10:00 キャンプ撤収-11:20 C2発

3:00 C1着-3:30 C1発-5:40 BC着

C1 キャンプ撤収-9:00 BC出発

全員がBCにそろう。10人用の夏用にテントに16人が集まりアタック成功を祝う。

12:30就寝

• 1月5日

6:50起床 7:30朝食 BC撤収 10:20 BC発-4:20沢渡

4:50沢度発-5:50島々着 6:05発-松本 解散

### ○春山合宿

積雪期北アルプス全山逆縦走

期日 1961年3月9日~4月4日

場所 北アルプス全山逆縦走

参加 縦走隊 CL 大西道夫 SL 新名一英 小穴自成 中村和夫

サポートI 槍沢隊 3月9日~19日

L 丸山孝 新井陽一郎 藤井哲士 栗林紀子 松橋容子

サポートII 船窪隊 3月9日~27日

L 柳沢勝輔 中沢俊夫 尾形誠也 星野安雄 井原睦雄 玉井洋明

サポートⅢ 遠見隊 3月17日～4月4日

L 小野義郎 柳沢正一 川端三四 戸沢義久 小林盛男 宮島卓郎

<計画にあたって>

信大長野山岳部は来る春山シーズンに北アルプス全山逆縦走計画した。北アルプス全山逆縦走は我々の目標のひとつとして長い間秘められてきたが、32年以前の後立山研究に引き続き、33・34年の穂高研究に至って、ようやくその期を見るに至った。はからずも今年4月信大各山岳部は信大山岳会結成に成功し、信大全体で新しい登山が始まろうとしている折から、わが部の長年の夢である全山逆縦走を行うことは新しい段階に進む上に意義あることと思う。

大学山岳部が4年間という限られた枠の中での登山活動であることは、毎年新人訓練の繰り返しに終わることが多く、こうした画期的な登山はメンバーや資金など多くの好条件に恵まれた年以外出来にくいか、幸い今年は部員数32名を数え近年最も充実した年であり、部の総力を結集してひとつの登山と取り組むには良い機会と考える。

他方積雪期登山をすべて極地法で行ってきた我が部にとって異なった登山型式で積雪期登山を行うことは諸形式の面白みや困難さを知り、広い視野にたって登山を行っていく上面に常に考えられてきたことであった。このような意味からこの計画を実現することは我が部の今後の発展の上に力強い礎となるものと思う。

北アルプス全山逆縦走は1657年関西大学により初めて行われ、横尾尾根より穂高小屋に至り奥穂高を往復した後白馬に達しており今回の計画が成功すれば国で2回目になる。我が部も積雪期に横尾尾根から穂高、北尾根から前穂高、槍ヶ岳・船窪・遠見の合宿等万全の準備をしてきた。

縦走は槍沢・船窪・遠見の3か所にサポート隊を送り、縦走隊を支援する方法をとり、縦走の成功を第1目標として行いたい。従って常にメンバーの最高の構成をもって当たり、大別して1・2年はサポート隊の中心要員となり、3・4年は縦走及びサポート隊の円滑な運営をはかる。構成は信大長野山岳部全員をもって当たる。

この計画遂行に当たっては参加人員、日数、装備の不足、資金等の問題や縦走行程中の難所の処理、縦走隊とサポート隊の連絡等、長期間における身体保持等の幾つかの困難な問題があり、これらを結集して問題解決に当たっていくつもりであるが、関係各位の暖かい助言と協力を願う次第である。

冬を迎えるや早くも富士山初め各地で冬山の遭難が起こっているおり、我々も遭難を起こさぬよう、心して登山に取り組みたいと思っている。

35年12月10日 信大長野山岳部主将 蒔田 修

## 縦走日記 大西道夫

### ・3月9日 晴れ

丸山・新井遅刻。1：30松本出発。清水トンネル手前にキャンプ。

### ・3月10日 晴れ 後曇り 晴れ

快調なピッチ、デブリの跡がひどし。5ピッチで上高地着。木村氏宅に届け書を出す。

小雪舞い岳沢見えず。明神あたりから晴れ。天気が完全に回復するころ徳沢園着。

### ・3月11日晴れ

槍沢小屋までサポート。完全にクラストした河原を自由歩ける。3ピッチで槍沢小屋着。

日陰に入って昼食。シャツ1枚で汗を流す。槍沢小屋はすっかり雪の下、雪洞を半分ぐらい掘ってデボする。

### ・3月12日 晴れ

昨日に引き続き天候も雪の状況もよし。二ノ又の少し上で沢の水がなくなった。槍沢小屋で雪洞を二人分に広げ、その他にウインナーを張る。

### ・3月13日 快晴

朝3時出発。早起きはちょっとつらいが星を見て歩くも又楽し。初めてアイゼンを使用する。初め雪崩の危険多し。最後の肩の小屋まで直登し冬期小屋にたどり着く。苦労して雪出しをして快適なねぐらを作り、デボし、ガスと月明かりの中を槍沢キャンプに下る。

### ・3月14日 雪

朝から雪。疲労も激しいので停滞。朝方から周囲で雪崩の音がする。本日より天気図を引く。表層雪崩の発生条件は揃った。

### ・3月15日 快晴—曇り—晴れ

雪の状態悪いが天気は良さそう。朝4時出発。ルンゼどうしに登る。ひざまでのラッセルに苦しむ。ピッチごとに雪を切って調べる。クラストの上に3層の雪が積もっている。小雪の舞う中ラッセルを交代して進む。8：30肩の小屋着。昼食の後槍の穂先に登る。天気は完全に回復するも西鎌尾根からの風は強く、北鎌尾根まで足を伸ばした丸山・子穴・藤井の三人は帰りが遅れ、結局下から救援しての夜間クライミングになってしまった。

### ・3月16日 雪

終日吹雪にて動けず。明日からの縦走にむけて荷物の整理をする。結局3人分の装備が30kg・食料30kg・個人装備が一人17kgで一人当たり37kgの計算になる。夜は丸山さんの

卒業式と新井君の落第式とサポート隊の慰労会を行う。

• 3月17日 晴れ

激励の言葉も風に打ち消され、固い握手の後強風吹きすさぶ西鎌尾根を下る。丸山・藤井は縦沢岳までサポートしてくれる。西鎌尾根の下りはピッケルもアイゼンもさらぬほどの蒼氷で、高度のバランスを必要とする。足首が痛し。下り切ると風は弱くなるが今度は暑さに苦しめられる。硫黄沢側にはぼってりと雪がつき不気味。幾度かトラバースしたりラッセルしてコルに着く。縦沢岳の登りは胸までのラッセルで遅々として進まず。縦沢岳の頂上でサポート隊と別れる。荷物ががっさりと増える。12:15双六小屋に着くがまだ時間が早いので双六の頂上まで足を伸ばす。ラッセルひどく疲れ切って2:45双六から三俣よりの直下に雪洞を掘る。

6:00肩の小屋発 - 9:35西鎌尾根末端 - 11:30縦沢岳 - 12:25双六小屋

2:45雪洞地点 - 4:00雪洞完成

• 3月18日 晴れ

一日中風に悩まされる。雪洞にずいぶん雪が吹き込んだ。風で体がふわふわし休む場所もなし。三俣の小屋までワッパとアイゼンを併用する。小屋は屋根のみ見える。鷲羽岳の登りは最も厳し。雪深く風強く、二呼吸に1歩三呼吸に1歩と風にタイミングを合わせて登る。結局3ピッチで鷲羽岳頂上、2ピッチで雪田に着き、三人ともひどく疲労。赤岳に登るとぼっかりと小屋が現れる。雪がぎっしり詰まっているが雪洞よりはまし。一晩中風の音に悩まされる。

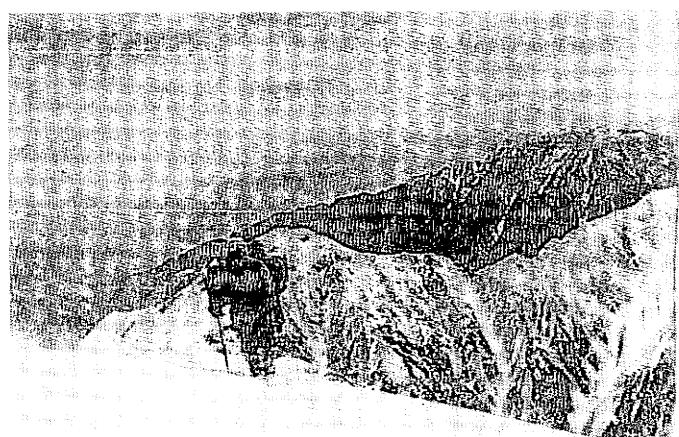
5:00起床 7:50出発 - 1:25雪田 - 2:15赤岳小屋

• 3月19日 風雪共に強く停滞

風の音が一日中絶えず。戸を開けるとたちまち中に積もるほど吹き込む。食料を減らしたいという気持ちに勝てず喰っては寝る。

• 3月20日 風雪

寝過ぎて6:15に起き外を見ると快晴。パンをかじって早々に飛び出す。赤岳の岩尾根を越すまではコンテニアスで進



1961.3 春山全山縦走

む。痩せた稜線をリッジ状に進む。野口五郎岳の登りで大阪府立大と市立大のパーティーに会う。そこからは夏道が出て快調なピッチが続く。5ピッチで三ツ岳の下りになり、鳥帽子岳が目の前に迫ってきた。右下に高瀬川が春の息吹を感じさせる。三ツ岳を下り、少しラッセルをすると鳥帽子小屋に着く。小屋に着き朝食と夕食を合わせて食べる。コッフェルを抱え、柱の回りを回りながら食べる。

6:15起床 8:00出発—8:40東沢乗越—9:45野口五郎岳手前コル

10:40野口五郎岳—11:45三ツ岳手前コル—1:00鳥帽子小屋

• 3月21日 曇り

今日は船窪のサポート隊に会える予定。輪かんじきを着けてもまだ膝までの雪に朝から悩まされる。南沢岳の下りで千葉大の縦走隊と会う。我がサポート隊は昨日不動まで来今日も来るだろうとの情報を得て元気百倍。不動の登りは豪雪に悩まされる。11:10下り始めた所でサポート隊の柳沢・星野・井原と合流。お互いの無事を喜び合う。3ピッチで森林帯を抜け、坂を上りつめた所にサポート隊の前進雪洞があり。ラーメンをごちそうになり、急斜面を下り切ると中継の雪洞がある。サポート隊は他の大学パーティーの遭難救助をしていて予定が遅れたとのこと。全員（柳沢・中沢・尾形・星野・井原・玉井）と合流する。本計画の立案者でもある中沢俊夫氏は特に「本当に着いた、本当に着いた、と抱きついて喜んでくれた。中沢・柳沢は、卒業式や就職等のため出来るだけ早く下らねばならず、明日の天気も怪しいため、今日のうちに船窪小屋まで行くことにする。薄暗くなってから小屋に着いた。

4:00起床 6:40出発 7:20鳥帽子岳下 8:45南沢岳 10:10不動

11:10サポート隊と合流 11:50前進雪洞 5:00同発 5:45船窪乗越

6:00小屋着

• 3月22日 晴れ 停滞

前日の疲労で停滞とする。10:10サポートのため全員で出発。北葛岳より、一足先に柳沢・中沢は下山する。他はそこから北葛岳の直下まで下り、食糧・装備等をデボする。星野・井原・尾形・玉井の働きが大きく、逞しく育っている。予定より行程が3日程進んでいるため、食糧を食べ込んだ。

• 3月23日 雪 停滞

吹雪激し。出発準備をしアイゼンまでつけて天候を見るが、風益々激しく停滞とする。

吹雪で入り口が埋まり、ラッセルに苦労する。

• 3月24日 曇り

6：30船窪を後にする。縦走隊に新名が加わり4人となる。サポート隊に北葛岳と七倉岳のコルまでサポートしてもらう。デポ地点で荷物を掘り出し、4人が奪い合うように荷物を自分のザックに。蓮華岳の登りは夏道伝いに。途中で突然かもしかに出会う。驚いて猛烈な速さで視界から消えた。4ピッチで登り切る。頂上から針ノ木小屋まではフラフラしているがご機嫌な下り。

5：30起床 7：30出発 7：45七倉岳 9：20デポ地点

1：35蓮華岳頂上 2：30針ノ木小屋 4：20夕食

• 3月25日 曇り 風強し 停滞

3：30起床 風強く雪が吹き天候回復を待つが望みなしと判断し停滯とする。しかし実際は天候が良く完全に風にだまされて天候判断を誤る。八日間の燃料・食糧があるので安心してどんどん食べたのが誤りのもとであった。

• 3月26日 雪 停滞

4：10起床 気圧配置が怪しくなってきた。吹雪強く停滯とする。暇なので調子はずれの歌や、ニワトリのあくびのものまねなどで時を過ごす。手製のトランプもあきる。小屋内はマイナス8度、居心地悪し。

• 3月27日 雪 停滞

3：00起床 天候悪くなる一方。雪容赦なく小屋内に吹き込む。食糧の食い延ばしを始める。25日に行動しなくて良かった。なるべく大きな声を出さないようにエネルギーを蓄える。

• 3月28日 雪 停滞

相変わらず天気悪く外に出られず。食糧は2日分しかない。31日まで停滯なら涙を飲んで下山しかないが、鹿島槍ヶ岳のキレットまでとばしても2日はかかる。31日まではここに頑張る事とする。食事をしなくても腹一杯になる方法を皆で考えたがだめだった。「針ノ木食い延ばしの歌」ができ上がった。

• 3月29日 雪後晴れ

誰か2人が下る案が検討された。蓮華尾根を下り大町で食糧を購入して遠見尾根を登って待つという案であるが誰が下るか問題になる。初めから縦走してきた小穴・中村、船窪から加わった新名の3人が互いに下山をかってでた。結局明日まで待つこととする。8：30ころ急に外が晴ってきた。出発だ。今夜は月夜だ。行ける所まで行こう。

9：50出発。針ノ木岳の登りは胸までのラッセル。荷物を背負ったのでは1歩も進めない。ラッセル車を出動させ、役目を終わったラッセル車は荷物車に早変わりで能率

を上げる。5日ぶりの太陽がまぶしい。針ノ木岳からほぼ夏道伝い。3:50赤沢岳に着く。少し下って雪庇に雪洞を掘る。1時間程度で立派な雪洞ができ上がる。外は満月で昼のように明るい。大町の灯が美し。

9:50出発 12:35針ノ木岳 3:50赤沢岳 4:00雪洞掘り

・3月30日 晴れ後曇り 強風

強風の中で出発の合図。体で飛ばされそうで時々岩にしがみつく。顔に氷が張って前が見えず。稜線伝いに、また雪庇を踏まないようにフラフラ進む。良くぞ鳴沢岳といえり。呼吸苦し。鳴沢岳の下りは特に悪し。わずかなスリップも許されず、万一滑ったら何百メートルとなく黒部の谷に落ちて行くだろう。休む場所とてなし。風が弱まればラッセルに苦しめられる。新越乗越は又ラッセル車の出動。長く苦しいラッセルが続く。種池小屋に他のパーティーがいたが我がサポート隊の消息は得られず。爺岳の登り、下りは雪も少なく快調。風は少し強いが天気は持ち直し、わずかに春の香り。3:30冷小屋着。他パーティーが残してくれたクラッカー等沢山の食糧を置いていってくれたので、今夜は満腹大会を開く。

3:50起床 4:40朝食 6:30出発 7:10鳴沢岳 7:55新越乗越 9:30岩小屋沢岳 12:05 種池小屋 3:30冷小屋 4:45夕食

・3月30日 晴れ

7:10出発 ここより先は人通りがはげし。立派なトレースがついている。1時間40分で鹿島岳頂上へ。ここからキレットまでは最大の難所ということになっていたが大したことなく、ザイル等も使用しないですんだ。キレットには、かくね里に張り出した雪庇上に踏み跡があり、一休みする。出発しようとしたとたん、雪庇が音もなく崩れ、ザック1個を失う。わずかなタイミングで人は助かり、ひやっとさせられる。キレットから10メートルほどの岸壁の直登は補助ザイルのフィックスがしてあり、アイゼンのまま人の肩をステントに登る。キレット小屋には我がサポート隊はいなかつたが、荷物はデポしてあり。少し早いが白岳まで行くにはおそ過ぎるため、ここを本日のねぐらと決める。風の音が耐えないこの小屋も雪洞よりはました。サポート隊の伝言を見てお互いの無事を喜び合う。

4:10起床 5:20朝食 7:10出発 8:50鹿島槍ヶ岳 11:40キレット小屋

・4月1日 晴れ

キレット小屋から五竜岳まで岸稜がいやというほど続く。ほぼ夏道であるが、かなりの難所が多い。五竜岳から白岳までの下りは舗装道路のように快適。道のみ白く踏み

固められ、他は雪が吹きさらされ岩が露出している。サポート隊の雪洞を見つけ寝込みを襲った形となった。8：30懐かしい仲間の元気な顔がそこにあり。白岳の雪洞は掘り広げられはなやかな祝賀会が開かれ、ただひたすら食べるだけの4人を、サポート隊はあきれ顔で見つめていた。

3：45起床 4：30朝食 6：15出発 8：30白岳雪洞

・4月2日 雪 停滞

5：30起床 雪激しく停滞とする。雪洞内にぎやか。珍料理を次々に考案してはひたすらに食べる。ゆっくり静養の1日

・4月3日 曇り

八方尾根を下ることになっていたが皆金がなく、しかたなく荷物を置いて唐松岳まで往復し遠見小屋まで下ることにする。ザイル1本持って唐松岳までとばすも皆苦しそう。3ピッチで唐松小屋に。1時間20分かかる。強風のなか苦労してようやく最終点の唐松岳の頂上に七つの顔が笑っていた。満足感に包まれる。白岳に引き返しキャンプを撤収する。てきぱきと雪洞を片づけて遠見尾根を下る。少し下ると風はすっかりなごみ、春の日差しを浴びて広く見晴らしの良い尾根を下る。3：15遠見小屋着。おもいがけなくもストーブを囲んで夕食をとる。靴下を乾かすこと、歯を磨くこともできた。幸せ。

4：00起床 5：30朝食 7：15出発 8：40唐松小屋 9：00頂上 10：30白岳雪洞 12：35出発 3：15遠見小屋

・4月4日 曇り

小屋から下はクラストしており、急斜面にかかってから苦労する。ザックに乗って下るものあり。耳ががーんとしてよく聞こえず。全員元気。満ちたりた黒い顔だった。互いに信じ切った黒い顔だった。

テント	4	ツエルト	1	シート	10	エアーマット	3	スコップ	4
火器	8	ピッケル	18	アイゼン	18	ニコギリ	3	なた	3
ハンマー	3	ハーケン	13	カラビナ	19	アブミ	5	ザイル	9
アイスハーケン	3	捨て縄	3	竹竿	25	赤旗	50	コッヘル	1
鍋	6	飯盒	6	包丁	4	しゃもじ	4	テルモス	1
ラジオ	3	雪落しブラシ	4	カメラ	3	寒暖計	6	医療袋	3
電池スペア	22	ストック	2組	ベニア	6	針金	55m		

## 会計

収入 合宿費	56,700円
カンパ	1,200円
	計 57,900円
支出 食糧費	45,375円
装備費	5,327円
燃料費	4,480円
医療費	2,200円
通信費	180円
	計 57,558円
残金	342円

(以上の中には荷揚げ済の代金は含まれていない)

《本合宿は、縦走隊4名・サポート隊が3隊で総勢21名、3月9日から4月4日までの26日間におよぶ大規模で本格的な北アルプスの積雪期の縦走であった。我が部にとって輝かしい成果であると同時に、我が国にとっても当時、関西大学に次ぐ全山縦走であって読売新聞の全国版に1ページにわたって大きく報道された。

この計画の実質的な立案者は故中沢俊夫氏であった。この記録を心を込めて故中沢俊夫氏の靈前に捧げる。(大西道夫記)

## 充実期をむかえて—その2—

### —積雪期北アルプス全山縦走—

昭和35年度の活動は今考えてみるといろいろな面においてひとつの大きな充実期ということができるのではないかと考えられる。その概要は昭和35年度の項を見るとわかるがその主な理由は

1、新人歓迎合宿が長年の懸案であったオール信大で行う事ができた。

長野25名 松本31名 農学部6名 松本分校3名 繊維7名 計72名で徳本峠を越え上高地に入る隊列は長蛇の列で壮観であった。

当時大学側として、遭難事故の多発から救援体制確立等、全体的には装備の充実等経済的な裏付けも示して、統合を各山岳部に働きかけてきた。各山岳部の代表が数回にわたり準備会を開き、ついに本合宿が実現した。

72名の大部隊が整然と1週間の合宿を行ったことは、交流も出来画期的なことであった。

## 2、冬山合宿で北尾根から極地法で前穂高岳

OB・OGを入れて総勢20名によって豪雪をおして、慶応尾根から北尾根に取りつき、初めてのビバークも経験し、前穂高岳の登頂に成功する。

装備や食糧等現在では考えられないような状態で、装備は不十分な上重量が増し、その上防寒具も粗末で、厳冬期の冬山は大変な技術と体力を要したが、それまでの実績の上にたって、極地法という登山形式を完成し、部として大きな自信を得、次の春山に発展する基礎を築いた。

## 3、春山合宿の北アルプス全山縦走で、初めて積雪期の縦走形態を確立する。

縦走隊4名・槍沢サポート隊5名・船窪サポート隊6名・遠見サポート隊6名、計21名、期間3月9日～4月4日までの26日間に及ぶ大規模なものであった。

このような、我が部にとって未経験な縦走を、ほぼ計画通りに遂行出来たということは、部員のチームワーク、部の技術力、経済力等が充実していなくてはならず、新しい段階に入ったということができよう。

## 4、一枚岩のチームワークによって無事故記録を更新。

現実には他大学や他学部の遭難事故は大変に多く、多くの若く有能な命が失われていったが、我が部には幸いなことにそのような不幸な事故はなく、それも単なる偶然ではないと考える。それを信州大学長野山岳部の伝統として誇りにさえしてきた。

しかし、部運営の方向として新しい兆候がなかったわけではなかった。従来の長野山岳部方式は、個人よりチームの方針を重視し、部員の縦の関係も厳格で、どちらかというと保守的な体質をもっていた。それに対し、松本山岳部は対照的に個人の意志を大幅に尊重して、自由な雰囲気にあふれていた。1年間松本でそのような雰囲気を体験してきた部員は、長野山岳部方式になじみにくく、部内に次第にその不協和音があふれてきた。その現れとして翌36年度の冬山合宿などに具体的に兆候がみえた。2年後の38年剣岳の秋山合宿の、柳沢進君・山形文武君という二人の尊い命を失う悲しい出来事も、この事と無関係ではないように思うが、これは言い過ぎであろうか。（大西道夫）

## 1961年度（昭和36年度）

### ○新人歓迎山行（計画）

期日　期日　4月29日～5月4日

場所　東銀座一常念岳一大滝縦走

構成　C L　中村和夫　S L　小穴自成

星野安雄 下倉邦夫 柳沢正一 松橋容子 上杉信之 大西通夫 新井陽一郎  
栗林紀子 尾形誠也 藤井哲二 石井一哉 好川宏次 守谷恭亮 船本英幸  
中村元子 井原松美 以上18名

#### 行程

- 4月29日（土）長野—有明一中房温泉一合戦小屋
- 4月30日（日）合戦小屋—燕岳一大天井岳
- 5月1日（月）予備日
- 5月2日（火）大天井岳—東天井岳—横通し—常念岳—蝶ヶ岳
- 5月3日（水）予備日
- 5月4日（木）蝶ヶ岳—大滝山—徳沢—上高地—長野

#### ○夏山合宿（計画）

期日 7月15日～8月3日  
場所 北アルプス白馬—船窪—槍ヶ岳—北穂高岳縦走 及び涸沢定着合宿  
構成 CL 小穴自成 SL 藤井哲二  
大西道夫 新井陽一郎 石井一哉 下倉邦夫 川端三四 井原睦雄 好川宏次  
守谷恭亮 近藤恒昭 市川幸一 尾形誠也 西村国夫

#### ○秋山合宿

期日 10月1日～8日  
場所 北アルプス涸沢周辺及び冬山の為の表銀座偵察  
構成 本隊 CL 大西道夫 SL 西村匡夫  
井原睦雄 新井陽一郎 柳沢正一 石井一哉 船本英幸 峯村吉泰 川端三四  
偵察隊 L 新名一英 SL 中村和夫 藤井哲二 星野安雄  
O・G参加 宮下常子 宮本範子

#### 行程

- 10月1日 雲り—晴れ—曇り 長野—横尾  
松本駅で偵察隊の4人を大糸線に見送る。本隊は上高地に入る。紅葉にはまだ早いが、人出は相当なもの。その人の群れと根ごと吹き倒された倒木を避けながら、全員快調に歩を進める。  
6:00長野発 8:41松本発 9:40島々発 11:40上高地着 1:00同発  
1:35明神館 2:30徳沢園着 4:05横尾着
- 10月2日 雲り—雨 横尾—涸沢

ザック内のガソリンが漏れて、ちくわと塩辛がガソリンくさし。本谷に出会いあたりから霧雨が降り出し、次第に強くなるも、全員元気に涸沢に着く。雨に霞む涸沢のテント村には繊維学部の山岳部のテントをはじめわずか数張りで、3張りのS N A C のテントが伝統の位置に目立って、居心地も好。夕刻前穂高岳側より大きな落石あり。思わず北穂高東陵かと身を起こし肝を冷やした。

6：10起床 6：20朝食 7：00出発 8：10本谷出会い 11：00涸沢池ノ平キャンプ地着 11：30昼食

・10月3日 雲り一雨 南稜一滝谷偵察—ザインテングラード

天候思わしくなく、出発遅れる。南稜途中で一昨年・昭和34年の夏ファーリア登山で遭難死した塚本君のケルンに立ち寄り黙とうを捧げる。「恨みはつきせぬこの場所に、静かに眠れ友の靈」北穂高の頂上は風が強く、滝谷がガスの中に黒く見え隠れする。北穂高小屋の主人小山さんも健在。北穂高から涸沢岳まで各ルートを探索しながら、鋭角の稜線を行く。一気にザインテンを駆け降り、快い疲労感で皆夕食まで眠る。夕刻遅く午後から降り出した雨に濡れながら、宮下・宮本OG 到着した。

5：00起床 5：40朝食 7：15出発 8：05～8：25南稜塚本君のケルン  
9：00～10：00北穂高小屋にて昼食 10：30ドームピーク 11：45穂高小屋 12：00ザインテングラード 12：35B C着 5：10夕食 7：35宮下・宮本OG着

・10月4日 雨 停滞

雨強く停滞 読書あるいは寝る者と様々。食糧が予想外に早く腐り始め、肉は悪臭を放つ。この肉を使うかもめるが、夕食に使うことにする。腹痛や下痢を起こした者なし。晴れ間を見て、朋文堂の裏に格好のロッククライミングのゲレンデを発見し各自の技を競って楽しむ。

3：30起床 5：10朝食 11：30昼食 5：10夕食

・10月5日 雨 停滞

雨強く今日も停滞。テントの中では知っている限りの歌をどなって、それに飽きたとペラペラの紙でトランプを作り、夜遅くまで楽しむ。入山予定の中沢OBはついに現れなかった。

4：30起床 6：00朝食 11：30昼食 5：20夕食

・10月6日 雲り一雨 東稜—第二尾根—南稜

涸沢をとりまく北穂高東稜・奥穂高・前穂高・屏風の頭・常念岳と並んだ大パノラマは合宿始まって以来の青空。皆元気に出発。稜線に出ると、後立山から今期冬山予定

の表銀座、すぐ目の前に横尾尾根、その横に大キレットが切れ落ちている。更に目を遠くに転じると、浅間・八ヶ岳・富士山・南アルプスも見える。

滝谷の第二尾根の取りつき点までのルートに手間取ったが、大過なし。同時に 4 パーティー 8 人が続けてぶら下がる。まさにロックガーデン化した第二尾根。ピッチが順調に上がり、水野クラック前の岩影で昼食にする。紅茶・チーズがうまい。いよいよ最後の水野クラック。先に登った大西が側面から監督、バランスの乱れに乗じてシャッターを切っている。全員登り終えて松波岩に集い、爽やかな満足感に包まれる。東稜から北穂高の登りはガスが巻いていたが、南稜を下り始めると、下は視界良く無風。涸沢に小さい青テントが増えた。テントから新名・中村・星野の元気な黒い顔がのぞいていた。テントががぜん賑やかになる。藤井は槍沢を下って下山したこと。夕刻より風雨が一段と強くなり、テントのポールが曲がる。

#### ザイルパーティー

①大西一船元 ②峯村一井原 ③西村一宮本 ④石井一川端

3 : 00 起床 4 : 40 朝食 5 : 45 出発 7 : 40 北穂高頂上 9 : 00 第二尾根 取りつき点 10 : 50 昼食 11 : 30 水野クラック 12 : 40 松波岩 1 : 40 塚本君のケルン  
2 : 05 B C 着

#### ・10月7日 雨一曇り 停滞

雨にて停滯 宮本OG・峯村下山 9 : 30 出発

5 : 30 起床 7 : 10 朝食 12 : 00 昼食 5 : 00 夕食 8 : 10 就寝

#### ・10月8日 快晴 下山

今合宿の天候からすると思いもかけぬ快晴で、紺碧の空の色が目にしみる。再度訪れることを胸に誓って、黙々と歩くが、この梓川沿いの山道には、リッジ通しの痩せ尾根のまた岸壁登攀のあの激しい胸のときめきはすでない。しかし、ひとつの合宿をなし遂げた後のさわやかな充足感がある。

#### 偵察隊 新名一英

秋山合宿と時を同じくして冬山の偵察山行を表銀座にて行ったが、天候不順のため、満足すべき偵察を行うことはできなかった。行動中ほとんどガスに覆われ、尾根の観察が不十分であり、また東鎌尾根においては雨に降られ、困難を極めた。行程順に気がついたことを記す。

#### ・中房まで

バス道を歩くだけであるが、沢渡一上高地のごとく平地ではないので重荷がこたえる

だろう

- 中房—燕山荘

中房から通称第一ベンチまでの熊笹の急斜面は雪崩を警戒する必要あり。以後合戦小屋までは森林帯の急な登りでラッセルがきつそうだが雪崩の危険はなさそう。独標までの灌木や熊笹の斜面はクラストしていれば容易だが、ラッセルならきつそう。独標より燕山荘までは尾根どうしに辿れば問題はなさそう。

- 燕山荘一大天井

風強く積雪少なそう。大天井の取りつき点にキレット状の岩があるが、鎖もあり、冬も露出しているらしい。大天井の登り下りともかなり急斜面だが、積雪は少ない模様。夏道は中腹を巻いているがむろん冬はピークへのルートと辿るべきであろう。

- 大天井—西岳

牛首ヒュッテからすぐ稜線の登りにかかり、以後稜線伝いだが一ヵ所岩塊があり。どちらを卷いたら良いか不明。雪庇が一定方向に出ないらしく、また強風に悩まされるだろう特に大きなピークはないがガタガタいくつもの登り下りを繰り返しているうちに西岳に至る。

- 西岳—乗鎌尾根

西岳を下って東鎌尾根へ取りつくには、小屋を少し行き過ぎた地点より派生する尾根を下ることになる。かなりの急斜面であり、雪崩の注意も必要で、最も難所と考えられる。東鎌尾根の困難なことは明らかであるが、雪がつくとどう変化するか全く予想がつかない。はしごや鎖等は案外そのまま使用できるかもしれない。

むろん西岳からザイルパーティーを組んで、アタックに向かうより他にないだろう。

- 総括

困難と予想される所に雪がつき、案外通過しやすいこともあるだろうし、またその逆もあるだろうが、積雪状況など例年とあまり変わらないので従来の他パーティーの記録を見ることによって、ルートの研究は可能である。冬山までは後2ヶ月ほどあるが、各自研究をしておいてほしい。またルートのみならず食糧装備等何か良いアイディアがあれば公表して頂きたい。

## ○冬山合宿

期日 12月25日～1月6日

場所 北アルプス燕—槍ヶ岳

## 構成

本隊 CL 新名一英 SL 小穴自成

中仲村和夫 尾形誠也 石井一哉 星野安雄 柳沢正一 井原睦雄 川端三四

峯村吉泰 新井陽一郎 船本英幸 大西道夫 (25—27) 中沢俊夫 O B (31—3)

## 行程

• 12月25日 入山 雲り一小雪

6：52松本発、神城でバス下車荷が重く肩にくい込むが全身の筋肉の快感も久しぶり。首尾よくトラックに便乗することができた。信濃坂で降り、3ピッチで中房温泉に着く。かすかに小雪が舞い積雪20センチくらい。快調に進むが夏山合宿以来の新入部員にはつらそうであった。中房温泉は合戦沢手前の林間にベースキャンプを設営する。その後リーダー等数人で第2ベンチまで偵察を行う。雪も少なくトレースも利用できそう。

6：52松本駅発 7：25有明駅着 7：35バス発 7：50神城着 8：15同発

8：40 トラック便乗 9：30信濃坂着下車 9：40発 10：50温泉口 11：30中房温泉着 1：20昼食 1：30偵察出発 2：20第2ベンチ 3：00B C着

• 12月26日 晴れ

◇先発隊 CI設営 CI入り (小穴・中村・尾形・石井・星野・峯村)

天気も良く、ラッセルもないのに合戦小屋にて後発のサポート隊7人に追いつかれた。冬用ウインナー2張りを設営するが、荷物を入れると誠に窮屈。夜食器類を外に置き強風で一部紛失した。

3：30起床 4：50朝食 6：40発 7：25第1ベンチ 8：00第2ベンチ 8：35

第3ベンチ 8：50第4ベンチ 9：45第5ベンチ 10：40合戦小屋 11：30独標

12：40熊山荘 2：15 C 1設営 5：30夕食

◇後発隊 CIサポート (新名・井原・新井・川端・船本・柳沢・大西)

森林帯を過ぎ合戦小屋あたりから急に積雪量 (2メートルくらい) が増したが、全員アイゼンで登る。ルートは稜線上で夏道は使えず。独標あたりまでは快晴無風。富士山が大きい。燕山荘稜線の風の強さにいまさらのように驚く。

7：00発 7：40第1ベンチ 8：15第2ベンチ 11：00合戦小屋 12：40燕山荘

1：30燕山荘発 2：25第2ベンチ 3：00B C着

• 12月26日 吹雪

◇C II設営 (大天井岳 大天荘) 小穴・中村・星野 C II入り

朝食の頃から天気崩れる。小穴リーダー20分程外で天候をいろいろ観測し出発の命令を出す。大天井の登りまでは夏道を使って尾根を登る。40分ほど費やして登るが、よほどの風がない限り安全なルートだが、岩が多く露出しておりアイゼンが泣く。蛙岩の大天井側は少々やっかい。装備の不備から指先が凍傷となる者おり注意必要。

4:30起床 5:30朝食 7:30出発 8:00蛙岩 9:20切り通し岩

11:40大天荘着

#### ◇C II サポート隊尾形・石井・峯村

帰りは旧道から夏通に移る箇所で往路の岩尾根をさけブッシュ脇にステップを切り下る。石井の努力で有明側にルートを開き以後ここを利用。強風と露出のため尾形類に第1度の凍傷、峯村は第2度の凍傷を負う。隣の文理の後藤さんに薬をもらう。

7:30発 11:40大天荘着 3:00 C I 着

#### ◇B C サポート隊（新名・新井・井原・川端・船本・柳沢）

C I 停滞と見越し、サポートだけでC I 入りするが、誰もおらず。C I は明日からの天候の悪化の予報に悪天をおし、C II を設営した由。大西スキーで下山する。

7:20発 8:05第1ベンチ 8:40第2ベンチ 10:56合戦小屋 1:00燕山荘着

2:10同発 3:20 B C 着

・12月28日 快晴 午後風

#### ◇C II 牛首コルまで偵察（小穴・中村・星野）

9:00発 小穴は夏道の使用可能かどうかを偵察。中村・星野は予定の大天井の頂上から大天井ヒュッテまでの直線ルートを偵察。小穴は夏道が通過できないことがわかつたため元の道を戻り二人のルートを歩いたため遅れ二人を心配させる。下の小屋から牛首の登りは思ったより短く、雪庇も余り発達していないため良好。牛首の西岳側からの登りは三つのこぶがありうんざりする。槍ヶ岳がやけに近く見える。

1:00 C II 着。大天井の小屋は前に他のパーティーがいたようだが、今はいなくひどく寒い。隣に東京医大のドクターのパーティーが入っており尾形の手の凍傷と峯村の顔の凍傷を見てもらう。

#### ◇C I 尾形はC II 入り。

石井・峯村はサポート素晴らしい快晴で山々のパノラマが目を奪う。浅間の噴煙がすごい。縦走路のウインドクラストにアイゼンが歌う。帰路蛙岩で新名・柳沢が出迎える。新井・船本が燕岳に登頂する。

5:10朝食 8:00発 11:15大天井のC II 着 12:05同発 2:00 C I 着

5 : 10夕食

・12月29日 快晴

◇C II 停滞

昨日と同様良い天気なのにC I 設営及びアタック要員の不足のためC IIIが出せず。食料は十分だが装備が上がっていない。

◇C I 石井・井原・川端・新井 C II 入り

峯村合戦小屋よりの3人とサポート

◇B C C II サポート

大かたの期待を裏切って快晴。C Iには朝寝坊をして、とりあえず先発予定の新井・峯村が朝食中に到着したので、この二人と計5人でC IIにサポートする。C Iの残り3人は少し遅れて出発。大天井の頂上では意外にも小穴・中村に会う。この快晴を逃した先発隊のふがいなさにがっかり。C IIの4人は小穴・尾形の凍傷や装備の不足から動けなかつたらしい。

7 : 00合戦小屋（新名・柳沢・船本） 8 : 00 C I 着 9 : 05同発 11 : 40 C II 着

1 : 10同発 2 : 45 C I 着

・12月30日 快晴 風雪

◇C II 停滞

全員準備を整えて出発を待つが風強く、また昨日C IIした二人の疲労回復のため、停滞とする。C Iよりアタック用の三ツ道具類が上り、これでようやくC III設営の準備が整った。あすはC IIIを設営したいものだ。ラジオの電池が切れたまま持ってきたため、ヘッドライトの電池を針金でつないでラジオを聞いている始末。C IIの人数が9人になったためC IIIの設営が非常に楽になった。2年部員のたるみが気になる。

◇C I 船本C II 入り 新名・柳沢C I サポート

天候は悪いが三ツ道具をC IIに上げなくてはならないので強風の中をC Iまでサポートする。

・12月31日 快晴 無風

◇C II C III設営 小穴・中村・井原・星野 C III 入り

尾形・新井・石井・川端・船本 C II 入り

大天井の下りは一か所ザイルフィックスが必要だが、ザイルが不足のため通過後取りはずす。赤沢岳の頂上を過ぎたころより戸板を立てたような稜線を通過しなければならないため40メートルと30メートルのザイルをフィックスする。ここが最大の難所と

思われる。今日もまた手違いから、アタック用エアーマットをCⅢに持ち上げながらまたCⅡに持ち帰ってしまった。自分の持っている荷物の内容を把握していない例が目立つ。注意したい。距離が長いだけに西岳を往復する労力は大きい。疲れきって飲むミルクうまし。夕食は6人に火器一基のみ。大晦日らしきもの何もなし。アメをなめなめ歌い続ける。6:30 CⅡ発 7:05 大天井ヒュッテ 8:10 牛首赤沢岳コル  
12:10 西岳山荘 1:00 同発 4:40 大天井CⅡ着

◇CⅠ峯村 CⅡ入り 新名・柳沢サポート

- 1月1日 晴れ後雪

◇CⅢ槍ヶ岳アタック 中村・井原・星野 小穴サポート

東鎌尾根に下るルートは急なうえにいくつも尾根が走っているため十分注意が必要だ。天丈沢乗越しまで小穴リーダーがサポートする。大槍ヒュッテを過ぎたころより吹雪始める。槍への登頂者は今日も30人位ありそうだ。食糧3日分とツエルト・火器・燃料が1.6ℓがあるので遅くなればどこでもビバークできると思うとちょっと安心できる。槍の肩の小屋を出る頃から吹雪は一層ひどくなり大槍ヒュッテまでのルートは時々はずれそうになる。最後のピーク、西岳の上まできたら6時となり、吹雪と暗やみのため小屋の方向をつかめず、頂の北側で風を避けてビバーク。全員ほとんど休憩なく歩いたため、のどが渇き水を飲みたがる。火器が快調で、火力をローソクほどに絞って7時から3時まで燃やす。ツエルト内の水分が多く、全員びしょぬれになったが元気で飲んだり喰ったり歌ったり。6:20発 8:10 天丈沢乗越し 10:10 大槍ヒュッテ 11:15 肩の小屋 12:15 槍ヶ岳取りつき 12:40 槍ヶ岳頂上 1:15 肩の小屋  
2:10 大槍 ヒュッテ 3:30 天丈沢乗越し 4:10 最終コル 8:00 東鎌尾根ビバーク

◇CⅡ停滞

- 1月2日風雪

◇CⅢ ビバークサイト—CⅢ CⅢのそばに旗を2本も立てておけば昨夜無事にたどりつけたと思うとちょっとがっかりしたがビバークの初体験を1月1日にしたと思えば嬉しくなる。CⅢに帰り朝食を食べぐっすりと寝る。CⅡからは誰も登らず。

6:45 ビバークサイト発 7:30 CⅢ帰着

◇CⅡ停滞

6:30 出発の体制が整い小屋を飛び出したが突然新雪に腰まで没する。稜線は風が強くよろよろする。シュプールはすぐ消えて、視界は全くない。しばらくラッセルする

がついに断念して引き返す。

◇C I 風雪強く 停滞

中沢OBが盛んに大天井に行きたがるが天気は悪いし、その上合宿始まって以来8日間働き続けなので停滞。寝正月とする。

- 1月3日 風雪 停滞
- 1月4日 快晴 午後曇り 強風

◇C III撤収 — C II

風強いが快晴 みそ汁にローソクが入ったためか全員腹痛気味。風邪に苦しめられている者もいるが、快調にラッセルして西岳のテントにたどり着く。撤収準備全然できておらず。サポート隊にアタック成功を伝え皆で喜び会う。今日までサポート隊として至らぬところが多々あったが、一部にそれが絶対的なものであるとはいえ、ただ「極地法」というだけの理由で一方的に献身的、盲目的な全員の協力団結を要求するようなふしが見えたが、惰堕・怠慢のいくらかはあったとしても、それぞれの心情を理解され得ず終わったことに対し、遺憾と思わざるを得ない。

- 1月5日 風雪風強し

◇C II C II撤収 — 中房温泉BC

天気待ちで出発が遅れるが、風強く、軽量の部員が吹き飛ばされたほど。

8:20C II初 12:30 C I着 4:30 BC着

◇C I C I撤収 — 中房温泉BC

- 1月6日 曇り後晴れ

BC撤収 — 下山

6:20起床 7:30朝食 10:30撤収出発 1:30神城発 6:20松本着

リーダーの小穴が痛烈に反省している通り、チームワーク・装備・食糧・医療等大きな課題の残る合宿であった。

○春山合宿

期日 1961年3月10日～31日

場所 北アルプス船窪一白馬縦走

構成

縦走隊 L 藤井哲士 井原睦雄 峯村吉泰 下倉邦夫

八方サポート隊（15日～27日）

L 石井一哉 川端三四 船本英幸 守谷恭亮 中村元子 井原松美

## 市川幸一 尾和剛一

### 行程

- 10日 曇り一晴れ一曇り 長野一七倉

大勢に見送られて出発。葛は静か。高瀬川は音を立てて流れ、対岸の山肌の色合い美しい宮林署の小屋で泊まる。

8:10長野発 11:40大町発 12:17笹平発 2:10葛発 2:40七倉 3:30峯村着 4:00夕食

- 11日 晴れ 七倉からデボ

今日から冬山装備で行動する。雪は少ない。しかしラッセルをして尾根の上に出昼食とする。

5:10起床 6:05朝食 6:50発 1:30デボ地点 4:05七倉着

- 12日 曇り時々晴れ 七倉一船窪雪洞

デボ地点までラッセルもなく快調に進む。時々突風あり。船窪の小屋は雪に埋まってだったので雪洞を掘る。疲れからか皆口数少なし。

5:00起床 6:20朝食 6:52七倉発 9:40デボ地点 5:20船窪小屋 7:30雪洞掘り終り 10:05夕食終わり

- 13日 曇り 小屋掘り

朝吹雪の音と寒さで目が覚める。雪洞のぽっかり穴が開いてシュラフに2センチほど雪が積もっていた。朝食後小屋の窓に向かって雪を掘り出す。少しもたがわず窓を掘り当てることができた。

7:00起床 8:30朝食 10:00小屋掘り終わり 2:00昼食

- 14日 晴れ 船窪小屋一デボ地点往復

昨日とはうって変わり良い天気 余り冷え込まないためか、雪柔らかく、アイゼンに雪がつき歩き難し。

5:10起床 6:30朝食 7:55発 10:10デボ地点 2:55小屋着

- 15日 雪 停滞

- 16日 雪 停滞

- 17日 雪 停滞

- 18日 雪後晴れ 停滞

10:00まで待つが雪のため停滞とする。午後外に出ると青空で周囲に沢山の岳権が見える。船窪・不動・鳥帽子・槍ヶ岳・がはっきりと見える。小屋の後の七倉の空が真っ

青で時たま雲のような雪煙が舞う。明日は針ノ木岳に行けそうだ。大町山の会の人があり、明日小屋主が来るとのことなので早く逃げ出すことにする。山小屋には手紙を出しておくべきだった。反省

・19日 晴れ一曇り 船窪小屋—針ノ木小屋

七倉と北葛岳のコルからの登りは急で森林帯を抜けきった頃よりラッセルあり。蓮華岳の登りは雪がほとんどなく、夏道が出ている。

3：40起床 5：00朝食 6：14発 6：53七倉 8：03コル 9：20北葛頂上

1：15蓮華岳 2：30針の木小屋 6：30夕食

・20日 曇り後雪 針ノ木小屋—赤沢岳の雪洞

昨日よりの低気圧で停滞の予定であったが天候を見て出発。針ノ木の登りは予想以上に急だった。赤沢岳を少し下って、夏の雪渓あたりに2時間かけて大きな雪洞を掘る。そばに雷島が沢山遊んでいた。

6：20起床 7：50朝食 11：05針の木 11：53スバリ 2：50赤沢岳 3：00雪洞  
地点 3：15雪洞掘り始め 8：30夕食

・21日 曇り後雪 赤沢岳の雪洞—種池の雪洞

天候悪く停滞と決めるが次第に天気良くなるので遅いが出発とする。鳴沢岳付近はアイゼンがだんごになり歩きにくし。新越しあたりもラッセルきつし。種池の夏のテント場の500メートル位手前で尾根を間違える。ラッセルひどし。種池小屋に引き返し雪洞を掘ううとするも固くて掘れず、ビバークとする。

5：30起床 7：30朝食 11：10発 11：50鳴沢岳 1：30新越し 2：50岩小屋沢岳 5：00種池 雪洞掘り

・22日 曇り 種池の雪洞—種池小屋

皆眠っていないのでフラフラしながら歩く。輪かんじきを履いてのラッセルあり。岳樺の樹氷が桜の花のごとく美し。

7：30朝食 11：00発 12：05種池小屋

・23日 晴れ後雪 種池小屋—キレット小屋

初めての好天で、蓮華・針ノ木・スバリ・中央アルプスも良く見える。鹿島・剣が近くに見える。冷の池あたりはトレースがついて快調に進む。鹿島吊り尾根を過ぎ、夏道通りにトラバースするとコンテニアスで進む長崎大のパーティーがいたがすぐ追い越す。トレースまったくなく、5か所ほどトラバースするがひどく怖い。キレットから100メートル位手前で藤井が偵察に出る。キレットの夏通は雪庇で全く登れないの

で、キレットの真上を登る。ここは逆層でハーケン・カラビナを使う。荷物は長崎大と共に引き上げる。キレットに着いた頃より雪まじりの風が強くなり登り終ったのは5時30分。

朝のザイルや木綿のヤッケ・オーバーズポンはびしょぬれで重く、冷たし。すでに暗くトレースがわからず、電池を頼りに小屋にたどり着いたのは8時15分。ザイルは2本は必要。長崎大はキレットを登った所でビバーク。その後小屋に関西登山会が入って同宿する。4：40起床 5：45朝食 6：45発 7：45爺ヶ岳下 10：04布引き  
11：08鹿島 3：10キレット下 5：30キレット上 8：15キレット小屋

• 24日 晴れ後雪 キレット小屋—白岳小屋

五竜の下りでまた尾根を間違える。下りのトラバースは鹿島と同じく厳しい。雪混じりの風強く、トレースを見失う。視界50メートルで辺り一面白一色で、他のパーティーと一緒にということだけが心強い。ようやく白岳小屋に着いたが誰も居ない。しばらく捜すと雪洞が見つかり懐かしい市川・川端・船本が真つ黒な顔をのぞかせていた。

11：05発 3：22五竜 6：00白岳小屋

• 25日 晴れ 白岳小屋—唐松小屋

久しぶりの好天。唐松小屋では石井が待って居た。昼食後小屋の後ろの山に登った。スキーヤーが5人ほど登って居た。五竜はガスって見えないが、遠見尾根は長く続いて見える。

7：30朝食 8：35発 10：35唐松小屋 12：10昼食

• 26日 曇り 風強し 停滞

• 27日 曇り 風強し サポート隊下山

7：05サポート隊発 7：30まで強風の中を送る。視界きかず、トレースがすぐ消えてしまう状態。縦走隊は7：55小屋に着く。すっかり静かになり寂しい。小屋の中には風の音のみ響く。

• 28日 晴れ後曇り 唐松小屋—天狗の小屋

天気予報の低気圧の襲来に迷うが出発する。二峰にザイルをフィックスする。他のパーティーによってトレースしてあり。下りは5メートルほどのアップザイレン。天狗の登りで昼食を食べた頃より天気一変。天狗の小屋は埋まっているものと思い、途中に雪洞を掘るかどうか迷う。しかし雪洞に適した場所あらず。天狗小屋が使えたのは幸運であった。剣岳にガスがかかると30分ぐらいで暗くなり、2時間ともたないようだ。

8：40発 8：50唐松 9：40二峰 1：05二峰終わり 1：30天狗の登り

2:30天狗頂上 4:10天狗の小屋

・29日 雪 停滞

夜中に冷たくて小さな足が頬の上を歩き目が覚める。昼見ると、そのねずみの大きさに驚く。峯村棒を持って追い回す。

・30日 曇り 天狗の小屋一白馬山荘

強風の中を出発。白馬鎧の下りで三たびルートを間違える。黒部川に続く尾根を15分ほど下り、45分ももたつく。

ガスの中に杓子岳が薄ぼんやりと見え、その大きさに驚く。白馬山荘で昼食。風が強いのでしばらく待つが、天候の回復がないので、明日の天気に期待して今日はここに泊まることにする。快適な夜。戴き物を食べ過ぎ、下痢を起す。

・31日 晴れ 白馬一長野

昨日に着いたためか、白馬の頂上での感激は特になく、ついに来たかという感じ。今日最終日となって初めて快晴。戸隠・飯綱がすぐそこに見える。白馬大池から下はシリセードで下る。早大ヒュッテでオーバーシュウズをのんびりと脱いでいると、聞こえてくるアマチュア無線の声。「昨日白馬に登ったお客様の話によりますと、白馬山荘が2か所ほど荒らされていたそうです。ハイ ドウソ」大慌てでヒュッテを後にする4人。小蓮華・白馬・杓子・鎧、そして八方尾根・五竜と景色が変わる。さっきまでヤッケを着てあそこにいたとは思えない。華原が過ぎる。子供が野球をしている。赤い服を着た子が手を振っている。木立を過ぎて、辺り一面青みがかっている。水田では人々が仕事をしており、またいつもの恥ずかしさが襲ってきた。働いている人に悪いような気がする。みんなから取り残されたような気がする。

会計

収入 縦走隊	3,100×41,240
サポート隊	2,100×81,680
カンパ	610
	計 29,800
支出 食糧	22,996
燃料	1,530
装備	4,501
医療	775
	計 29,802

冬山合宿以来の部内のチームワークの乱れも修復されて、綿密な計画が立派に遂行され人間関係も回復し、大きな実績を上げた合宿であった。(大西道夫記)

## 女子部の記録

### ☆夏山山行

目的地 銀岳～針ノ木岳縦走

期 間 1961年7月6日（木）～7月15日（土）

参加者 栗林紀子・松橋容子・中村元子

#### 記録

○前日 7月5日 曇り時々晴れ 信大中庭にてパッキング



岳長次郎谷の出会い

連日雨。でもこの日はちょっと晴れた。勿論行いが良かったからだ。ザックにぎゅうぎゅう詰め込んで、さあできた9貫余の荷一。明日はこれを背負って、どの道を行くのだろう。

○7月6日（木）曇りのち雨

〔見送り〕：新名・大西・星野・下倉・石井・井原の諸氏。

6:00長野発 直江津行き。

8:30直江津着 乗り換え——11:51富山駅着12:36発——13:45千寿ヶ原着13:50

発——13:59美女平14:00発——14:50弥陀ヶ原着15:00発——17:20天狗小屋泊

★雨が強くなったり弱くなったりする。梅雨前線が再北上した模様。風が思い出した  
ように強く吹いている。テントは張らず、天狗の小屋泊まりとする。

○7月7日（金）曇りのち晴れ

4:30起床——5:30エッセン——6:10天狗小屋発——7:20雷鳥荘——9:30銀  
御前小屋——11:00銀沢のテント場着

★富山方面は晴れ、銀岳は、ガスの中。雲が低くたれ込め、視界悪し。房治温泉の辺  
りで道を見失い、時間をロスする。銀沢のガラ場にテン張る。

○7月8日（土）曇り

5:00起床——6:00エッセン——7:00出発——7:30銀御前小屋——11:30銀岳  
——15:30 テン場着

★霧 霧 霧。霧の中の銀は大きかった。

○7月9日（日）曇りのち晴れ

銀沢——長次郎谷の出会い——ハツ峰——銀岳頂上——銀御前——銀沢テン場

★長次郎谷の雪渓は大きかった。所々クレバス上に割れていて、通過するのに苦労し

た。急斜面の雪渓で、カッティングして足場を確保する場面もあった。ハッ峰の六峰に取りついたものの、ガスっていて方向が分からず、引き返そうかと思ったが、ガスの晴れ間を待って行動した。頂上近くで、空き缶のかたまりを見つけた時はほとした。三人で、頂上にたどり着いたことを喜んだ。帰りは、前日歩いた正規のルートを、ポンカラポンカラ下った。あこがれの剣に登れ、心はときめいていた。

○7月10日（月）雨 停滞

○7月11日（火）小雨のち曇り

剣沢—剣御前—雄山—立山—浄土山

★雨の中の行軍。雨足は、激しいときは下から上に降っていた。浄土山にてテン張る。

○7月12日（水）晴れ

浄土山—竜王—獅子頭—ザラ峠—五色ヶ原

★昨日とはうって代わっての晴天。ザラ峠での景観を堪能しながら五色に下る。遠く、日本海が見える。後立山の連峰も、おいでおいでをしているようだった。浄土からの道のりは短いけれど、本日はここにて一泊。

○7月13日（木）雨

★雨にて一日停滞。五色小屋に挨拶がてら遊びに行く。小屋の主人と、楽しく談笑。

柳川鍋等の食べ物の話に花が咲く。

○7月14日（金）晴れ

五色ヶ原—平の越—針ノ木峠

★五色から黒部を目指し一気に下り、また針ノ木を目指して一気に登る。黒部川のエメラルド色が印象深い。途中出会った人は、わずかに2人。針ノ木の登りは、行けども行けども峠に着かず、ひたすら忍耐の二文字につくる。

○7月15日（土）晴れ

針ノ木峠—針ノ木岳—蓮華岳—針ノ木岳—針ノ木峠==扇沢==大町==長野

★針ノ木小屋の舎長、百瀬美江氏に挨拶。針ノ木に登り、蓮華までこま草を見に足を伸ばす。こま草は、絨毯を敷き詰めたように群生し、この山行のフィナーレを飾ってくれた。

総じて、雨の多い山行であったが、あこがれの剣に2日登り、3000Mを一気に駆け下り、3000Mを一気にかけのぼった思い出多い山行となった。雨の日が続いたにも関わらず、平の橋が流されずに有ったことは、幸いだった。

## ☆秋山山行

目的地 五龍岳～針ノ木岳縦走

期 間 1961年 9月28日 (木)

～10月5日 (木)

参加者 栗林紀子 中村元子

井原松美

### 記 錄

○ 9月28日 (木) 曇り

[見送り] 新名・大西・石井・

遠見尾根にて

星野・下倉・松橋の諸氏

7：20長野発—10：45神城着—11：15下川氏宅に挨拶 スタート—17：00遠見小屋着—19：00エッセン—20：00沈殿

★遠見小屋まで相当時間がかかった。休みは、40分歩いて10分をきちんととることを中心がけた。台風13号の進度を気にしながら登る。1年生は、重いザックに苦戦していた。

○ 9月29日 (金) 晴れ

4：30起床—5：50エッセン—7：00スタート—16：30五龍小屋着

★朝の星空がきれいだった。ピッチはゆっくり過ぎたが、1年生と声を掛け合いながら登った。西遠見の池は水を満面にたたえ、我々を迎えてくれた。白馬連峰、鹿島連峰が左右に美しく見えた。

○ 9月30日 (土)

白岳—五龍岳—八峰キレット

★尾根歩きは楽しい。高山植物をめでながら登る。とはいいうものの、背中の荷物は重い。一年生2名とも、相当ばてた様子。名にしおう八峰キレットでテン張る。

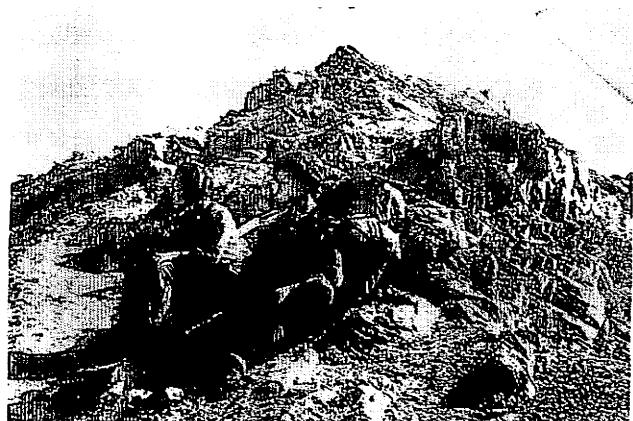
○10月1日 (日) 雨

★雨にて1日停滞。台風の影響か。明日の天候を祈って沈殿する。

○10月2日 (月) 晴れ

八峰キレット—鹿島槍ヶ岳—冷池—爺ヶ岳—種池

★八峰キレットは、それほどでもなかった。荷物を振られないように越えた。種池のテント場に着いたときは、薄暗かった。種池の水をカップにすくって渴いた喉を潤した。急いでテントを張り、食事にした。ここに、登山者多く、テント場は賑やかだった。



○10月3日（月）晴れ

種池——鳴沢岳——岩小屋沢岳——赤沢岳——針ノ木——蓮華岳

★朝、種池に水を汲みに行ったら、ミジンコが盛んに浮遊していた。夕べ暗くて気づかなかったが、このミジンコの水を飲んだことを思い、みんなで苦笑する。黒部川のエメラルドを横目に見ながら、今日も1日尾根歩きする。

○10月4日（火）雨

★雨にて沈殿。テントの中で、秋山の反省をする。

- ・雨具は、体力の消耗を防ぐためすぐ着用する。
- ・水が不足した。ポリタンクで運ぶ。
- ・ラジオは、天気予報を聞くため有った方がいい。
- ・今回メタが多かった。
- ・電池、洗剤、温度計も欲しい。

○10月5日（水）晴れ

針ノ木峠——針ノ木岳——針ノ木峠——扇沢——大町——長野

★計画通りにこの山行が完遂できたことを、まず何よりも喜びたい。八峰キレットは、心配していたよりも難所ではなかったし、1年生もがんばった。“千里の道も1歩から”的ことわざ通り、自分の足で歩いてみると、これを学んだ山行だった。秋の紅葉も楽しめた。



五龍岳にて

☆冬山山行

目的地 五龍岳

期 間 1962年1月4日（月）～  
1月11日（月）

参加者 栗林紀子 松橋容子  
中村元子 下倉邦夫

記録

遠見のボッカ…栗林・松橋・中村

11月12日（日）長野～神城 下川氏泊

13日（月）雪の中 下川氏宅～遠見小屋

14日（火）遠見小屋から西遠見往復

積雪80センチ ラッセル

15日（水）遠見小屋～長野

★遠見尾根に、荷揚げに行きました。八方尾根から下るつもりでしたけれど意外に雪が多くてラッセルが大変で、西遠見から引き返さなくてはなりませんでした。鹿島や五龍、白馬三山があまりにも見事すぎて、日の入った冷たい雪の尾根に佇んで、長いこと山に見とれました。いいですね、冬の山。冬になりかかった遠見という尾根は、全く長いですね。遠見小屋にベースをおくという構想は、すっかり駄目になりました、一つ、大遠見辺りにキャンプを出せたら楽になることが分かりました。

雪をかぶった山を見ると、ブルブルしちゃいます。五龍はなかなか手強そうですが、それだけにファイトが湧いてきました。

○1月4日（月）

長野——神城——遠見小屋

○1月5日（火）

遠見小屋——大遠見（往復）

○1月6日（水）

遠見小屋——大遠見 ベースキャンプ設営

○1月7日（木）

大遠見——遠見小屋（往復）／荷揚げ

○1月8日（金）／偵察・ラッセル

大遠見——五龍小屋（往復）／五龍小屋は雪の下、小屋より10メートル南斜面岩陰に、4名の遭難死体見つかる。連絡済みの由。

○1月9日（土）

大遠見——五龍岳（往復）／登頂成功

○1月10日（日）／荷物下ろし

大遠見——小遠見（往復）

○1月11日（月）

大遠見——長野

★1月9日 中村、松橋、下倉、栗林の4名で五龍の頂上を目指す。五龍の小屋まで、ラッセルをしたり、雪の飛んだ岩場を越えたりして快調に行ったものの、遭難死体有る岩場で、中村ふるえて足が前に出ず。これ以上前に進めず、下倉と2名、五龍小屋地点で待機。松橋、栗林の2名、ザイルで体をつなぎ頂上に向かう。雪が飛ば

された岩場に、アイゼンがきしむ。登ること約1時間、頂上に立つ。快晴で、頂上からの展望がすばらしい。黒部を越えて、剣岳の神々しい白い姿がドカーンと見えた。感激の握手。さて下山。2人が待つコルまで、慎重に慎重にアイゼンを踏みしめて下った。

下から、救助隊があがってきた。手伝いを申し入れる。

吹雪の日が多かったが、最後の3日間はバッチリ晴れて、それまでの辛さはどこへやら。サポートしてくれた下倉氏は、1日早く下山した。おかげさま、有り難うと見送り、S N A C女子部も翌日無事下山した。下山してから、遭難者の写真撮りをしたことで、部長から叱られてしまった。

(栗林 紀子 記)

## 信州大学山岳会へのステップ

昭和34年信州大学各山岳部統合の構想は大学側から提唱されたのでその初会合について記してみたい。その成果は35年度の新人歓迎合宿の第1回合同合宿に結実した。

### 信州大学各山岳部統合に関する初会合

一、日 時 昭和35年12月12日（土）11：10～17：30

二、場 所 信州大学本部第二会議室（松本）

三、参加者 本部 学生部長 補導課長を含め7名

松本山岳部 小林喜芳 小原武（文理）坂本正邦（医学）

教育松本分校 中島克広 小穴自成 藤井哲士

農学部山岳部 堀勝彦

織維学部山岳部 野村廣治

長野山岳部 小林盛男 片岡格（工学）大森晋 蒔田修（教育）

四、議 題「信州大学山岳部統合について」 総計19名

### 五、話し合いの内容

(1) 初会合に至るまでの経過報告 森林厚生補導課長

(2) 司会に小林喜芳氏選出 書記 長野山岳部担当

(3) 議事内容

a 各山岳部の実情報告（部員数・装備・経済・合宿・その他）

b いかに統合するか問題点検討

イ 統合することによって本部で予算、年額4・50万円が請求でき、装備を購入

できる。

- ロ 事故発生に対して各山岳部の協力体制をひくことができる。連絡を密にし、同一の行動をとるようにし、信州大学山岳会の統一を図りたい。
- シ 統合に際して部規約の検討（草案作り 後日各学部で検討、「目標」などを考える。次回は2月6・7日頃とする。）

## 六、話し合いの経過

最初に本部厚生補導森林課長の会合に至るまでの経過報告があり、この初会合の目的は遭難防止のために各学部山岳部を統合し、装備を充実したり、保険制度に加入する必要があり、12日に会議を開く運びとなったことが明らかにされた。

現在信大体育局があり、本部にその委員会が置いてあるが、その下に各学部のサークルが属している。このような形態でも山岳部がまとまれば本部としても「信大山岳会」を承認し、予算が請求でき、装備（大型テント50人用1張 ウインバー4～5人用7張 夏テント4～5人用 14張）の購入が可能になる。

これは来年度実現できる見通しがある。

## 各学部の現況

部	合宿・山行	部員数	部費等	装備	顧問等	その他
松本 文理 医	文理：医学S35年 合併 松高の伝統を受け 継ぐ 北穂高・後立を中心 に合宿 休暇ごとに入山	文 20 医 14 合宿全員 参加は不 可能	部費百円 予算 文1万円 医8千円	不足	医のみ 顧問あり	夏 上高地 にサマーキャンプ遭難救 助に不安
松本 教育	本年度縦走15日間 後立を中心に個人 山行多し 冬・春は合宿なし	11 実動 5～6	部費20円 学生会 1万円	不足 予算でシュラフ・ハーケン・アブミ等	顧問教官 あり	夏上高地 にサマーキャンプ 統合を熱望
農 学部	合宿の型はほとん どなく、2～3人 で個人山行型 あってもなき状態	名前を借りて10名 実動 2～3	予算 4千円	不足	学部との 関係よく なし	統一を望む

繊維 学部	学生会山岳部として4年前発足 夏 剑：後立、八ヶ岳等縦走 冬 八ヶ岳合宿 ワインバーなく小屋利用	25 実動 10	1合宿 1人10円 予算7千	不足 予算で装備購入 ハーケン・カラビナ・ツエルト・ザイル	顧問なし	統一に賛成
長野 教育 工学	S29年教育：工学 統一 各季ごとに組織的な合宿を行う 女子山岳部あり	教育 工学	18 8	部費30円 予算 年1万	不足 テントは学生会の物 冬山完全装備10人程	集中登山・ 新人歓迎山行など行動面での統一を希望

前記の会合をさらに重ね、新人歓迎合宿の準備会を行い、ついに昭和35年度の第1回の合同合宿が実現できる運びとなった。総勢72名に及ぶ徳本峠越えは壮観であり、上高地にベースキャンプを設営し、整然とした合宿が行われ各山岳部の交流が深まり、今日の統一にむけての記念すべき合宿となった。

(大西道夫)

## 1962年度（昭和37年度）

### ○新人歓迎合宿

- ・4月29日～5月6日
- ・上高地小梨平より放射状登山
- ・L中村和夫・S L井原睦雄・川端三四・下倉邦夫・峯村吉泰・石井一哉・新井陽一郎・星野安雄・上杉信之・柳沢正一・守谷亮祐・野村昌男・松橋容子・中村元子・秋元一浩・忠地文昭・船本英幸・柳沢進・市川幸一・川本美知代・町田O B・宮島O B・清水部長（23名）

4月29日

長野（6：00）＝島々（8：50）－岩魚止小屋（2：20）

4月30日

T S（7：40）－小梨平テント場（2：40）信大サイトにテント10張り。

5月1日

岳沢で雪上訓練（グリセード・ストップ等）

5月2日～5日

・西穂高岳　　・明神沢から前穂高岳　　・焼岳　　・横尾周辺等

5月6日

上高地発（7：50）＝長野着（3：00）

○夏山合宿

<男子パーティー>

・7月11日～7月30日

・遠見尾根～三俣蓮華～剣岳（定着）

・L井原睦雄・S L星野安雄・上杉信之・柳沢正一・金井光一・忠地文昭・柳沢進・野村昌男・柴田哲也・岡村知彦・船本英幸・荒川信二郎・比多井広

7月11日

長野（6：00）－遠見小屋TS（3：20）

7月12日　沈澱

7月13日

遠見（5：00）－白岳TS（11：30）

7月14日

白岳（5：30）－キレット小屋（11：50）－冷池TS（3：00）

7月15日

冷池（7：25）－種池小屋TS（9：30）小屋でバイト中の下倉・秋元に会う。7月16日種池（6：30）－針ノ木TS（12：00）2名下山する。

7月17日

針ノ木（5：30）－船窪岳（11：30）2名合流

7月18日

船窪（5：25）－不動岳－鳥帽子岳TS（3：00）

7月19日

鳥帽子（6：20）－三俣（1：45）

7月20日～21日　沈澱　2名下山する

7月22日

三俣（5：10）－黒部五郎（9：30）－太郎平（1：30）7月23日

太郎平（4：50）－スゴ秉越（12：30）

7月24日

スゴ（5：00）－獅子岳（1：00）



チョウノスケソウ

7月25日

獅子岳（5：05）－真砂沢（11：50）

7月26日～7月28日 定着合宿

・チンネ 　・長次郎谷 　・ハッ峰 　・源次郎尾根等

7月29日 TS（4：45）－長次郎下る－弥陀ヶ原（4：00）

7月30日

バス乗車（7：00）＝（富山駅（11：55）解散

<女子パーティー>

・7月20日～7月30日

・鳥帽子～五竜～白馬岳

・L松橋容子・中村元子・川本美知代

7月20日

長野（8：10）（七倉（12：15）－濁小屋（3：30）

7月21日

濁（5：40）－鳥帽子小屋（11：30）－テン場（1：15）

7月22日 TS（5：40）－南沢岳－船窪TS（5：00）

7月23日

沈澱とする。

7月24日

TS（4：40）－針ノ木ースバリ（2：20）

7月25日

TS（4：30）－種池小屋TS（11：30）

7月26日

TS（4：30）－鹿島槍P－キレット（1：00）

7月27日

TS（4：30）－五竜－唐松小屋（11：50）

7月28日 沈澱

7月29日

TS（5：15）－白馬岳（12：20）

7月30日

TS（6：30）－猿倉（9：40）＝長野（2：00）



コマクサ

○秋山合宿 <男子>

・9月30日～10月8日

・涸沢定着 穂高の岩場

・L中村和夫・S L星野安雄・上杉信之・下倉邦夫・新井陽一郎・峯村吉秦・川端三四・柳沢進・忠地文昭・船本英幸・野村昌男・秋元一浩・柴田哲也・野口忠世・金井光一・守谷亮祐・清水輝夫(17名)

9月30日

長野(6:00)=上高地－徳沢田(3:55)

10月1日

徳沢(7:00)－涸沢池の平(11:20)

10月2日～7日

・滝谷(第一・第二・第三・第四尾根・クラック・ドーム中央稜等の登攀)

・北尾根－前穂

・屏風の頭、涸沢槍東稜 等

10月8日

涸沢(8:20)－上高地(長野(7:10)

○秋山合宿 <女子>

・10月3日～10月9日

・燕岳～槍～北穂～涸沢

・L松橋容子・井原松美・中村元子・清水教授

10月3日

長野(6:00)=中房－燕山荘(4:25)

10月4日

TS(6:00)－西岳小屋(12:40)

10月5日

TS(8:00)－殺生小屋テン場(1:00)

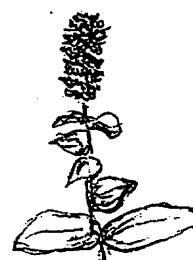
10月6日

TS(5:10)－北穂－涸沢(3:00)

10月7日～8日

男子隊に合流し、北尾根、屏風の頭等

10月9日



ウルップソー

下山（男子隊と一緒に）

<秋山合宿を終わって> （中村和夫記）

今回の秋山は滝谷の岩場を中心に行われた。というのは3年部員が大勢いること及び新人諸氏の実力があったためである。

滝谷の主なルートをトレースできしたこと、新人諸氏に1回以上は滝谷へ入ってもらったことが自分の最大の喜びである。

以前から3年部員の間に新ルートへの意欲があったので心配したが、無事に終ったので安心した。全員一層の努力と研究の末に更にバリエーションルートへと進出していってほしい。

## ○冬山合宿

<Aパーティー>

・12月24日～1月3日

・遠見尾根～五竜岳・唐松岳

・L井原睦雄・S L下倉邦夫・川端三四・上杉信之・秋元一浩・野村昌男・忠地文昭・榛沢進・柴田哲也・岡村知彦・野口忠世・荒川信二郎・中村元子・川本美知代（14名）  
12月24日

長野（6：00）=神城－スキー場（12：00）デボ

12月25日

地蔵の頭にC1設営（雪上訓練も行う）

12月26日

猛烈な吹雪となりテント破損、法政小屋横に移動してC1設営する。地嵐が凄い。

12月27日

T S（7：00）-五竜小屋横へC3（1：00）設営。大遠見にもC2設営する。

12月28日～1月2日

この間、C2・C3を拠点にして放射状登山を行う。唐松岳往復数回、五竜岳往復、白岳のラッセル訓練。ザイルワーク訓練も並行して行う。

30日～1日は風雪厳しく、他パーティーは小屋に逃げ込むが、我々はテント内でツェルトをかぶりふるえている。ラッセルに出たとたん、ヤッケが板の如く凍ってしまう。

1962年止まりで天国に召されてしまうかと不安になる。

1月3日

下山（C3-C2-C1）長野着（3：00）

## ○冬山合宿

<Bパーティー>

・12月24日～1月10日

・北鎌尾根（独標東稜）～槍ヶ岳

・L小穴自成・藤井哲士・星野安雄・峯村吉泰・新井陽一郎（5名）

12月24日

松本（6：00）・（葛温泉－第五発電所（4：30）

12月25日

湯俣（7：00）－千丈沢（1：40）ラッセルあり

12月26日

T S（7：15）－日大小屋（2：20）

12月27日

小屋（7：20）－P 1 前峰（1：10）デポ

12月28日

小屋（7：10－C 1 設営（12：00）

12月29日

P 1－P 2－P 3　偵察を兼ねて往復（C 2建設）



イワオトギリ

12月30日

C 2（7：00）－独標（11：15）（C 2設営）

12月31日～1月2日

風雪激しく停滞とする。テントが飛ばされそうになる。凍傷になった者も。

1月3日

Attackに出発！ C 3（7：15）－北鎌平（10：30）－槍ヶ岳P（12：00）－ビバーク

開始（7：30）ビバーク地点はP11の登り付近。

1月4日

ツェルトから出る（6：30）－C 3着（11：00）テントへ無事帰着。冷え切った手を握り合い顔を見合わせて笑った。生きて帰ったんだというテントへ着いた安心感と登頂の書び でせまいテントははちきれそうだった。

1月5日

C 3撤収（11：30）－C 1（7：00）北鎌沢にテントを落としてしまう。

1月6日

C 1 (6 : 45)－日大小屋 (11 : 00)

1月7日

小屋 (7 : 15)－千丈沢小屋 (2 : 45)

1月8日

小屋 (7 : 10)第一五発電所 (6 : 00)

1月9日

小屋 (1 : 40)－名無沢小屋 (3 : 25)

1月10日

小屋 (9 : 15)－七倉 (12 : 50)=長野 (7 : 00)

<冬山雑感> (小穴自成記)

事故も多数あったが幸いそれが直接遭難に結びつかず、またどか雪のため3日下山が遅れてご心配をかけましたが無事合宿を終了したことを書びたい。スリップ、凍傷、テント流失等数えきれない程。今回は上級部員のみ、それも精銳の連中であったから皆自主的に行動できると思って見守っていた。

山男である前に紳士でなくてはならぬ。社会生活において誰にも迷惑をかけず、自分の責任がとれれば紳士といえる。下の社会生活と山の生活とを区別するべきものではない。登山で求めるものは各人異なると思うが、逃避で山へ行ったら何が求められるだろうか。まず第一に下の生活を完全なものにしたい。

○春山合宿

- 3月16日～3月30日
- 横尾尾根～北穂～烏帽子岳縦走
- L星野安雄・下倉邦夫・峯村吉秦・秋元一浩・野村昌男・柳沢進 (6名)

3月16日

長野 (6 : 00)=島々 (10 : 10)－沢渡 (3 : 45)

3月17日～18日

大正池無人小屋までダブルボッカ

3月19日

小屋 (6 : 00)－横尾の岩小屋T S (2 : 00) 偵察

3月20日

T S (6 : 00)－横尾尾根P 5 (12 : 00)

3月21日

TS (6:00) - P5 デポと荷揚げ

3月22日

P5 (6:50) - 南岳TS (9:50)。ダブルボッカしてテント設営(稜線上)。

3月23日

北穂高岳アタックに出発(6:00) - 北穂頂上(10:30) - 南岳TS (1:30)

3月24日～25日

沈殿。愛知大学遺体発見のニュースあり。二ツ玉低気圧の襲来を受けて全員必死でテントを守る。気温-18℃。強風でガソリンを取りに外へは出られずホエバスの小さな火も消え冷え込む。「眠ってはだめだ」と声をかけ合う。朝6:30より風が少しおとろえホップする。小キジはテントの中の1斗缶に。昨夜は全く眠ってないので9:10頃よりシュラフに入る。

3月26日

南岳TS (7:30) - 槍の肩 (10:00) - 双六小屋 (2:40)

3月27日

双六 (7:00) - 三俣小屋 (10:00)

3月28日

三俣 (6:11) - 野口五郎 - 烏帽子小屋 (2:45)

3月29日

出発するも下山道が風雪で分からず引き返す。

3月30日

烏帽子 (6:45) - 潤 (11:00) - 葛北 (8:30)

<春山合宿を終えて> (柳沢進記)

入山前は何となく不安と躊躇の気持ちがあったことは否めない。何がそうさせるか知らないが合宿終了後の充実感満足感というか、行って良かったという感慨とはうらはらのような気がする。総勢6人のうち新人3人のこの合宿は、汗にまみれて泣いた夏山や寒さにふるえた冬山のような苦しさは少なく、ただ楽しさがいっぱいととっさに予想したものだった。果たしてそうだった。南岳で強風に吹きまくられ、全員で夜を徹しての異常な姿勢でボールを押された一夜を除けば。

○送別スキー

・2月2日～3日

・飯綱スキーハウス(借り切り)



クロユリ

・中村和夫氏と藤井哲士氏を送る会

星野安雄・井原睦雄・松橋容子・下倉邦夫・中村元子・峯村吉・市川幸一・柳沢進・秋元一浩・忠地文昭・野村昌男・金井光一・川本美知代・船本英幸・井原松美・清水洋一・柳沢正一・上杉信之・新井陽一郎・小穴自成（22名）

※もやしのいっぱい入ったすき焼きを食べ、飲み、歌い、話しつぶやく。飯綱高原の静けさをしばし打ちやぶる楽しい楽しい2日間であった。

＜昭和38年度新役員＞

C L 星野安雄 S L 井原睦雄 M 下倉邦夫

（下倉 邦夫 記）

## 1963年度（昭和38年度）

### ○新人歓迎合宿

- ・4月27日～5月5日
- ・上高地BCより放射状登山
- ・L下倉邦夫・S L川端三四・井原松美・柳沢進・清水輝夫・松橋容子・川本美知代・中村元子・聖成秀次・中村陸奥・中村淳子・望月映洲・浦正直・幸田友三・新井陽一郎・笠原正俊・荒井多美子・上杉信之・佐藤邦彦・駒井浩・山形文武・玉井雅子・植田徳昭・青木敬雄（24名）

4月27日 文理学部思誠寮泊（長野発5：20）

4月28日 松本（6：40）＝島々（7：20）－上高地の信大TSにBC設営（男子用2、女子用1、装備用1）（5：00）

4月29日 岳沢にて雪上訓練

4月30日 2隊に分かれ、雪上・登高訓練（西穂登頂等）

5月1日 沈澁 交歓会をする。実に面白い。

5月2日～4日

・霞沢岳登頂 ・奥明神沢～前穂 ・西穂沢～西穂 ・大滝山～蝶ヶ岳等  
いくつかのパーティーに分かれ、残雪の穂高連峰に登り、山行の経験を積む。

5月5日 下山。下における学生生活が待っている。

### ○残雪期裏銀座縦走

- ・4月27日～5月5日
- ・鳥帽子～槍～上高地

- L井原睦雄・忠地文昭・柴田哲也・岡村知彦
  - 4月27日 長野＝大町－葛温泉小屋 TS
  - 4月28日 七倉（9：00）－烏帽子小屋 TS（2：00）
  - 4月29日 烏帽子（5：10）－三俣小屋（3：40）
  - 4月30日 小屋（11：00）－双六小屋手前（3：00）
    - ガスでルート判明せず途中でテント張る。
  - 5月1日 風雨の中、テントをたたみ小屋へ避難。全員全身ビショ濡れ。シュラフは濡れて使用不能。
  - 5月2日 双六（5：20）－槍の肩（10：40）－上高地（3：40） 上高地定着パーティーに合流し、以後同一行動をする。

#### ○残雪期後立山縦走

- 4月27日～5月6日
- 白馬岳～鹿島槍ヶ岳
- L峯村吉泰・野村昌男・秋元一浩・野口忠世
  - 4月27日 文理学部思誠寮集合、泊
  - 4月28日 松本（5：30）＝四ッ谷（8：10）－大雪渓末端（1：00）
  - 4月29日 TS（6：00）－天狗小屋（1：30）
  - 4月30日～5月1日 停滞 雪上訓練
  - 5月2日 TS（5：30）－五竜小屋（12：00）
  - 5月3日 小屋（5：50）－鹿島槍P－冷池小屋（1：25）
  - 5月4日 小屋（6：00）－赤岩尾根－大谷原（12：00）
  - 5月5日 TS（6：00）－長野（12：00）（2日早く下山）

#### ○物見の岩合宿

- 6月29日～30日
- 大峰山 物見の岩
- L星野安雄・小穴自成・金井光一・荒川信二郎・荒井多美子・野村昌男・浦正直・秋元一浩・柳沢進・忠地文昭・井原松美・幸田友三
  - ※ 5月18日 岩登り訓練中にK君（2年部員）がクラシックルートを登攀中に誤って転落し左腕を骨折する事故が発生した。（すぐ入院）。

#### ○夏山合宿

- 7月23日～8月3日（12日間）

- ・南アルプス全山縦走（甲斐駒～光岳）
- ・L下倉邦夫・S L柳沢進・笠原正俊・佐藤邦彦・小川原五郎・山形文武・浦正直・植田憲昭・駒井浩・望月映洲・聖成秀次・秋元一浩（12明）（全泊、天幕）
- 7月23日 長野（6：00）＝韋崎（12：20）－神社横（3：30）
- 7月24日 TS（5：45）－七合小屋（3：10）
- 7月25日 TS（5：40）－甲斐駒P－馬の背ヒュッテ（4：10）
- 7月26日 TS（5：00）－仙丈岳P（6：30）－野呂川（1：30）
- 7月27日 TS（5：15）－北岳P（11：10）－間の岳（2：10）－熊の平（4：40）
- 7月28日 TS（5：00）－塩見岳P（11：00）－三伏峠（2：30）
- 7月29日 TS（5：10）－小河内岳P－高山裏（10：30）前日三伏峠で柳沢勝輔・吉沢健OBと落ち合うはずだったが会えずじまい。置き手紙をして出発する。この日も会えず残念。（あとで聞くと、お二人は我々を探したが見当たらず、別ルートへ行かれた由）
- 7月30日 ドクターストップとする。シュラフを干したり日光浴をしたり。
- 7月31日 TS（5：10）－赤石岳P（10：00）－仁田池（3：40）昼食時冷たい雨が降って来て疲労と寒さが増す。火気でなく一切薪を燃やしての食事作りなのでこういう日は苦労する。ぬれた木は燃えにくい。
- 8月2日 TS（5：25）－易老岳P－光岳（9：10）－本谷山上方（遠山川）（5：00）易老渡をめざして道なき道をがむしゃらに下に下る。合宿の無事終了を祝って河原でコンパを盛大に開く。
- 8月3日 TS（5：00）－木沢（7：15）＝平岡駅（8：25）＝長野（3：30）合宿最終日。豪快な3000m級の山を北から南へ12日かけて踏破した喜びはやはり大きい。一つのことをやり遂げたという喜びと安堵の表情がみんなの顔に出ている。

#### 〈夏山雑感〉（望月映洲記）

喉が渴き、唾がなくなても水が飲め（ま）なかつたあの日！

延々と続く急勾配をただ登らされたあの日！

雨で薪が燃えず煙りに泣きながら飯を炊いたあの日！

フラフラになつても歩かねばならなかつたあの日！

過ぎ去つた日々を想い出し、“苦しかつた”と過去形で言える現在、自分はこの上なく幸せだと思っている。

### 〈夏山の感想〉（聖成秀次記）

特に苦しかったのは北岳から間の岳にかけてであった。今考えてもゾッとする。あれ程あこがれていた北岳の頂上がどんなだったか全く記憶はない。しかし今となってはそれらの苦しみは、自分には不可能としてしか考えられなかった全山縦走が出来たという感激をより大きくしていると思う。自信がついた。

### ○夏山合宿〈女子パーティー〉

- 7月19日～7月30日
- 槍ヶ岳～三俣蓮華岳～剣岳
- L 松橋容子・中村元子・井原松美・川本美知代・荒井多美子・玉井雅子・中村陸奥  
7月19日 長野（6：00）＝島々（10：00）－横尾（5：20）  
7月20日 TS（5：00）－槍沢小屋（12：20）  
7月21日 TS（4：30）－槍の肩（10：40）－双六池（5：50）神医大OBに世話を  
になる。  
7月22日 停滞（ドクターストップ）  
7月23日 双六（4：25）－中の俣谷乗越（1：10）  
7月24日 TS（4：00）－太郎小屋－間ノ岳（2：25）  
7月25日 TS（5：00）－越中沢岳P－五色ヶ原  
7月26日 TS（4：00）－真砂岳－剣沢（3：15）  
7月27日 長次郎谷～剣岳P～一般道下山  
7月28日 平蔵谷～剣岳P～一般道下山  
7月29日 ハッ峰～平蔵谷  
7月30日 TS（5：00）－別山乗越（6：30）＝長野（7：20）  
7人みんな協力し楽しい合宿だった。



コケモモ

### ○剣岳定着合宿

- 8月14日～26日
- 剣岳の三の窓定着（放射状登山・岩登り）
- L 峯村吉泰・小穴自成・井原睦雄・星野安雄・忠地文昭・山形文武・駒井浩・笠原正俊・金井光一・望月映洲・中村陸奥（11名）  
8月14日 長野（23：00）＝富山－白萩川岩屋（3：00）  
8月15日 TS（6：00）－小窓コル（3：00）  
8月16日 TS（6：15）－池の平－三の窓（1：30）

- 8月17日 遭難救助を依頼され出動し感謝される。
- 8月18日～25日 ・チンネ北条ルート ・チンネ左下カンテ ・左稜線ルート ・六峰フェース等
- 8月26日 TS (7:30) - 馬場島 (3:00) =長野 (9:00)  
(5名は残留し、各ルートを登攀する)

#### ○秋山合宿

- 10月1日～9日
- 潟沢BC (岩登り訓練)
- L星野安雄・井原睦雄・荒井陽一郎・秋元一浩・中村元子・金井光一・浦正直・笠原正俊・駒井浩・山形文武・佐藤邦彦・中村順子・下倉邦夫・峯村吉泰・松橋容子・柳沢正一・野村昌男・柳沢進・柴田哲也・岡村知彦・玉井雅子・望月映洲・青木敬雄  
(24名)

- 10月1日 長野 (6:00) - 上高地 (11:00) - 横尾 (3:15)
- 10月2日 TS (6:00) - 潟沢 (9:40) 潟沢の中央にテント5張りを設営 (BC)
- 10月3日～8日 • 滝谷 (第一・第二・第三・第四・クラック) • 北尾根～前穂
- 前穂東壁 • P2フランケ • ドーム中央稜 • 屏風岩第一ルンゼ
  - こぶ尾根等
- 10月9日 TS (8:35) - 上高地=長野 (7:00)
- この合宿では北穂小屋のボッカを交代で行い26,000円の収入を得る。それを部の装備購入に当てる。
- 大勢でのにぎやかな秋山合宿も無事終了する。

#### ○冬山合宿 (A) (三つの合宿を同時に実施)

- 12月22日～1月1日
- 西穂高～奥穂高岳 (極地法)
- L星野安雄・峯村吉泰・上杉信之・柳沢進・野村昌男・笠原正俊・山形文武・柴田哲也・岡村知彦・駒井浩・忠地文昭 (11名)

- 12月22日 装備25貫、食糧49貫、燃料9貫の計83貫の荷物を11人のザックに納め出発。  
松本 (7:20) - 上高地 (1:10)
- 12月23日 ボッカ ラッセルありしごかれる。
- 12月24日 ボッカと偵察を行う。西穂山荘付近にBC設営
- 12月25日 BC (8:15) - 西穂P - BC (1:00)

12月26日 B C (8 : 20) - C 1 設営 (11 : 00)  
12月27日 C 2 設営する。  
12月28日 C 1、C 2 隊に分かれて行動する。  
12月29日 第一次アタック 前穂高岳登頂  
12月30日 第二次アタック 奥穂高岳登頂  
12月31日 C 2、C 1 撤収し、B C 集結  
夜は待望の合宿終了の祝杯をあげる。紅白歌合戦に耳を傾け山での最後の夜を送る。

1月1日 B C 撤収 (7 : 00) - 上高地 (12:10) = 松本着 (3 : 45)

#### ○冬山合宿 (B)

- 12月25日～1月1日
  - 遠見尾根～五竜岳・唐松岳
  - L 下倉邦夫・佐藤邦彦・小川原五郎・金井光一・望月映洲 (5名)
- 12月25日 長野 (6 : 00) - 神城駅 (11 : 30) - 遠見スキー場上 (1 : 45)  
12月26日 T S (9 : 40) 荷揚げを行う。  
12月27日 沈澱 笑い声が絶えず。  
12月28日 ラッセル訓練 大遠見まで  
12月29日 T S (7 : 20) - 西遠見 (2 : 00)  
12月30日 白岳斜面でのラッセル訓練、雪洞掘り。  
12月31日 T S (6 : 20) - 白岳-唐松P (9 : 15) - 五竜P (1 : 20) - 五竜小屋 (4 : 00)

1月1日 T S (8 : 15) - 神城駅 (11 : 50) = 長野 (3 : 00)

いい冬山だった。決定的だった。

小遠見の頂で大声を張り上げて山に別れを告げる。これからも遙かなる山の呼び声を心に感じ取っていきたい。そして、何かの機会でこうして山を知り、山の友を知っていったことに対して心から感謝したい気持ちになっている。

(金井光一記)

#### ○冬山合宿 (C) <女子パーティー>

- 12月25日～1月1日
- 八方尾根～唐松岳
- L 中村元子・井原松美・井原睦雄・川本美知代・中村陸奥・荒い多美子・中村順子・

玉井雅子

- 12月25日 長野（6：00）＝四ッ谷（11：25）－兎平の上方（3：15）
- 12月26日 T S（8：00）－第一ケルン上（10：45）
- 12月27日 T S（10：00）－東薬大ヒュッテ上（12：10）
- 12月28日 バンブーが折れ東薬大ヒュッテに入る。
- 12月29日 ヒュッテ（7：45）－テント張り（10：30）－唐松小屋（男子隊に会う）－  
T S（2：30）
- 12月30日 八方尾根を歩く。宮本OGが見える。
- 12月31日 T S（6：30）－唐松岳P（9：10）－帰幕（12：40）  
ついにみんなで唐松のピークに立つことができた。うれしかった。  
みんな思い思いに今回の合宿を思い起こしている。今にして思えば、あの  
バンブーを折るほどの風雪がこの合宿にピリッとした味を与えたと思う。  
風に対して少し自信がついた。今夜は満月か、大きな月が出ている。八方  
尾根らしくない静かな夜だ。 （中村元子記）
- 1月1日 撤収（7：00）－兎平＝長野（2：30）

### ○春山合宿

- ・3月11日～4月2日
- ・槍沢経由前穂高アタックと槍ヶ岳より鳥帽子までの縦走を行う。
- ・L下倉邦夫・野口忠世・柳沢進・忠地文昭・金井光一・笠原正俊・佐藤邦彦・小川原五郎・聖成秀次・浦正直・秋元一浩・駒井浩・岡村知彦・望月映洲・青木敬雄・川端三四（16名）

- 3月11日 上高地陸送のトラックに大量の荷を積み出発。  
松本（6：30）－釜トン上の小屋跡（2：00）
- 3月12日 小屋（5：30）～荷揚げを行う。（トリプルボッカ）。
- 3月13日 2隊に分かれ荷揚げとデポを行う。（荷次ぎ小屋）
- 3月14日 小屋（6：00）－横尾（11：30）－槍沢小屋（4：20）
- 3月15日 荷揚げとデポと偵察を行う（3隊）。
- 3月16日 地吹雪激しく（風速20m位か）沈殿とする。
- 3月17日 合宿7日目。雪崩の危険もあり沈殿。
- 3月18日 2名下山。槍沢はウインドクラストしていて危険。
- 3月19日 T S（3：10）－槍ヶ岳山荘（8：00）－帰幕（9：30）C 2隊は南岳に

向かう。

- 3月20日 TS (4:15) - 槍沢ではガスでルートが分からず引き返す。C2隊は小石が舞う程の風雪の中を南岳小屋入り。
- 3月21日 沈殿。雪崩の危険あり、日中は槍沢を登れず。
- 3月22日 TS (5:00) - 槍の肩 (12:00)
- 3月23日 C2隊は北穂高アタックをまず成功させる。(全員南岳へ集結)
- 3月24日 前穂高アタックに出発(柳沢・岡村)(南岳より2日の行程)。  
南岳 (6:00) - 北穂高岳 (8:30) - 奥穂山荘 (10:30) - 前穂P (12:40) - 奥穂山荘 (2:00) (ツェルトで泊まる)
- 3月25日 奥穂 (6:00) - 北穂 (12:00) - 南岳帰還 (4:00)  
涸沢コル辺りでアンザイレン。ルートにあまり自信がない。途中で大キジを打つも、風と雪で出が悪い。北穂のいやな斜面、気持ちの悪いトラバース。吹雪は一向に快方に向かわず。attackが出来たのだ。南岳で皆の顔が見えて手を固く握ったとき目がジーンと熱くなった。握った手をいつまでもそのままにしていたかった。この天気によく行って来れたもんだと思う。俺はうれしい。もっともうれしい時だ。帰りは実に行きの2倍以上の時間を要した。夢中だったのだ。そしてみんなにもう一度抱きつきたくなるような気になって来る。  
(柳沢進記)
- 3月26日 切戸まで往復する。  
外は-16°C、テント内は+19°C、その差35°C、大変なものだ、下山5人。
- 3月27日 望月君、大やけど(何かの拍子で9人分のみぞ汁がこぼれ、右足首を火傷)。彼をどう運ぶか難しい判断。
- 3月28日 南岳～肩の小屋まで背負って歩く(4人)。荷運び(5人)。
- 3月29日 裏銀の縦走をとり止め、全員で彼を背負い下ろすことに決定。沈殿(冬期小屋)
- 3月30日 肩 (7:15) - 双六小屋往復 - 槍ヶ岳P (2:20)
- 3月31日 肩 (7:10) - 西岳P (9:30) - 肩 (12:00)
- 4月1日 肩 (6:00) - 横尾山荘 (12:30)  
下倉・笠原・駒井・小川原の5名で望月君を交代で担ぐ。秋元・岡村・野口・聖成の4名で全員の荷物を運搬する。湿った雪に悩まされる。一步步く毎にズブッと沈み困難を極める。

4月2日 横尾（4：00）－河童橋（8：40）－山吹トンネル（4：30）＝松本（8：00）

まず夜中の梓川を腰までつかって渡る。トレースから一步外れるとひどくもぐる。

河童橋で休憩。上高地の春。それから長いバス道を黙々と歩く。雪崩の跡ばかり。釜トンを必死に通過。

沢渡でマイクロバスをチャーター。全員集結したときは本当にこれで23日間の長い合宿が終わったという実感がした。

望月君を松本市の自宅へ届ける。彼は火傷の痛さ、背負われる苦しみを6日間じっとがまんしてくれていた。もっと早く下山すべきだったと反省。すぐに信大病院へ入院。

（下倉 邦夫 記）

#### ○春山合宿〈女子パーティー〉

- ・3月14日～20日
- ・梅池～白馬岳
- ・L中村元子・井原松美・川本美知代・荒井多美子・中村順子

3月14日 長野（7：10）－森上（11：00）－赤坂（2：45）

3月15日 TS（7：10）－天狗原（11：30）

3月16日 停滞。パンブーが折れた。

3月17日 TS（9：00）－乗鞍（1：45）

3月18日 TS（11：30）－第一ケルン（2：30）

3月19日 TS（7：10）－小蓮華岳（10：00）－白馬岳P（11：20）－三国境（2：30）

風はあるが快晴の白馬岳ピーク。青い空、白い稜線……もう最高である。

小穴さんと星野さんがスキーつけて上がって来ていた。

3月20日 TS（9：00）－森上（3：20）＝長野（8：30）

白馬岳は、雪あり風あり雲あり、そしてあたたかい仲間のいた山だった。

－死ぬことがこわくてどうして生きることができるんだ。

－死ぬことがこわくてはじめて生きることができるんだ。

（中村元子記）

## 装備について思いつくままに

### <登山靴のこと>

やっと学校に通わせてもらっている者にとっては、「登山をするから登山靴を買って下さい」とは、なかなか言い出せないことだった。だから何とか親をだまして、お金を用意しなければならなかった。それも出来なければ、人に借りるより他に使用が無い。私は1年の冬に入部し、最初の山が「猿倉－小日向コル－杓子－杓子鑓」の春山合宿。勿論そんな時だから靴、ピッケルも借物だった。靴は越田さん、ピッケルは坂井さんだったのかな？

[記憶どうり、他はキスリング大（中沢）、シェラフ（河口）、ヤッケ（中沢）記載あり。]

2年の夏山合宿には、自分で買った靴を履いて行ったように思う。憧れ「タケウチ」製ではなく、値段が安い他のメーカーの製品だった。固くなければならない爪先の革が、この合宿の時ではないがいつしかつぶれてしまい雪渓にステップを切るときに大変苦労した記憶だけは今も残っている。教員1年目、念願の靴を、自分の給料で手にしたのだった。

### <テントのこと>

自分達が寝泊まりしたテントで思い出されるのは工学部の、特にあの白っぽい、7人位がい寝泊まりできる大振りのテントが懐かしい。

2年の夏山合宿で、針ノ木から「平」を経て「剣沢」に向かった。その時「一乗越」にテントを張った事がある。そこは涸沢かと思えるほど、テントが花盛りであった。テントを張ったその日は良かったのだが、翌日から雨、豪雨と言ってもいいような雨でテントの下は湿ってくるし、その内にテントの内側を雨が伝わるようになった。それに背中が触れると自分が濡れてしまうので、皆が背中を触らせないように腰を折り曲げて、苦しい体勢を維持するのに必死だ。雨は降り続き、テントは益々垂れてくるし、風は強くなり、テントから出ている張り網は取付け部分から切れるし、全くのササラホウサラだった。しかし、お陰でその時テントの修復の仕方を覚えた事は有難いことだった。結局この時2日間の停滞を余儀なくされた。「さあ、出発」と言う時、周りに張っていたテントが僅かになっているのに驚き、停滞も1日位なら骨休めに望むところだが、このような苦しい停滞は、もう沢山という想いだった。ラジオが無く天気予報を聞く事も出来ず、何がなんだか判らなかったがどうもその時台風が通り過ぎたらしい。

<火器のこと> 積雪期の山ではアラジン、ホエブスをよく使った。

\*石油専用のアラジン…メタでよく暖めて、石油を気化させてから火を点けるもので、不十分な状態で点火すると生の石油が飛び出し大変だった。その様な時、よく「化けちゃう」と言うような言い方をしたものだ。比較的音が大きく、エッセン当で早く起きた時など、

この音に安心感を与えられた記憶がある。性能が落ちてきたためか、次第に使用頻度も少なくなり、そのうちに使わなくなった。

\* ガソリン専用のホエブス…ガソリンタンクの上部を暖めて使うのは、これもアラジンと同じであるが、これは音も小さく、安定した火力を供給してくれた。使い易かったので卒業してから買ったのもこのタイプであった。アラジンに比べると、多少重かったが、何にも増して丈夫である事が有難かった。

#### <ザイルのこと>

部会のある時に、時々は教育学部の中庭の木と木の間にザイルを張り、ワセリン掛けをしたのを思い出す。12MMの重い麻ザイルであった。雪山では「アイゼンで踏むな」と誰もが何回となく注意を受けた。物見岩で練習に使ったのも、この12MMの麻のザイルであった。だから、リーダーの小林先輩が、8 MMナイロンザイルを持ってきた時、その軽さや太さに吃驚すると同時に確かに不安も感じたものだった。私自身が、岩登りにナイロンザイルを使ったものは、北岳のバットレスを登った時が初めてであった。それも11MMナイロンザイルである。今でも8 MMには不安を感じる。

#### <ザックのこと>

黄色の大きなキスリング、山岳部に入ってまず買わされるのがこのザックで横への広がりがあり、荷物を入れるにも入れ易くバランスをとる上にも大変好都合であった。布地が厚く、多少の雨では殆ど中が濡れないし、ザックの大きさを、寧ろ誇りとして背負って歩いたものだった。部を辞めた人から買い取ったこのキスリングは、私の汗を“いや”と言うほど吸い込んだ、懐かしのザックである。

【註】キスリング型ザックはS32年の夏山から使った特大のもの。大勢の新人用にと自分のザックを参考に設計し、松本のハマヤで造らせた。#留意した主な点

- I 横巾…テント（ウインバー）が横にすっぽりと入る。
- II タッシュ…飯盒が二つ重ねてスマースに入る。
- III 丈…斜めにすれば（人間が）腰まで入れる。
- IV 生地の厚さ…パッキングの時腰崩れしない。

以上を勘案し寸法、生地の厚さを定め、更にI～XIIのローマ数字背番号とS N A Cを付けた、あの橙色の特大キスリング（6号帆布使用）が誕生した。女子用は9号帆布〔6号では縫合が難しい〕で、市販のザック（大）の寸法にした。【註】小林 記



—町田使用ザック—

(上原金四郎)

## S32. 3年頃の装備あれこれ

物見岩のトレーニングでザイルとかジッヘル、セルフブレイ、アップザイレン等々登山用語は理解するのがやっとだったが、新人部員にとってキスリング、ピッケル、シラフアイゼンは、何と強烈に心に滲みいった品名だったことか。といっても新人には高嶺の花、先輩から借用するのと代用品での装備だった。1955年の横尾合宿で私はキスリング、ピッケル、アノラックなど久保田さんから借りて、シラフは毛布を袋に縫って代用し、一夜だけリーダー（田島）に使用させてもらいその心地良さを実感させて貰うと共に冬山迄にはシラフを購入するようアドバイスされたことと、また一丁ぐらいのアイゼンと地下足袋で小槍の登攀を狙った上級部員は“青氷で、とても歯が立たない”と大槍登頂に切り替え、3パーティー共、アンザイレンで雪の大槍に登ったことをありありと記憶している。

高校時代に山岳部におり、登山のある程度の経験者はいざ知らず大学に入ってから山登りを始めた者－新人部員には登山用具など有ろう筈が無い。なにせリックサック位の名前（品名）しか知らない田舎ものだったから。従って合宿前打合せ会の無くてはならない事－装備調達だ。装備係の腕の見せどころは如何にして先輩や山に行けない仲間から借用するか、代用品で装備を賄うかだった。昭和34年度冬山合宿の例を挙げると

個人装備貸借表（装備係 大西）

	蒔 田	中 沢	町 田	柳 沢	大 井	若 狭	大 西	中 村	尾 形	斎 藤
ザック	○	○	○	○	○	○	○	○	○	丸山
シュラフ	○	祢津	○	○	○	大塚	片岡	○	宮下	丸山
登山靴	○	○	○	○	○	○	○	○	○	祢津
ピッケル	○	○	片岡	○	小林	宮尾	○	○	宮下	丸山
ワカン	○	○	○	○	祢津	○	○	○	○	丸山
オーバーシューズ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オーバースポン	○	○	丸山	○	○	宮尾	祢津	*	*	*
アイゼン	小林	吉沢	田島	小野	久保田	*	*	*	*	*
ヤッケ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（註）○印は自身持っている装備。表中の名前は貸す人。上欄の名前は借りる人で、借りたものは一切責任を持って使用する。最高責任は装備係にある。

\*女子部の装備【貸借表】は丑山さんの「小さな思い出」参照のこと。

アイゼン、ピッケル、シュラフが借用品のベストストリーと表で明らか。新人がアイゼン・ピッケル等の装備まで手が回らず、先輩や不参加の仲間に頼っていた状況が一目瞭然。次に遡って昭和32年度春山合宿の事例を示す。

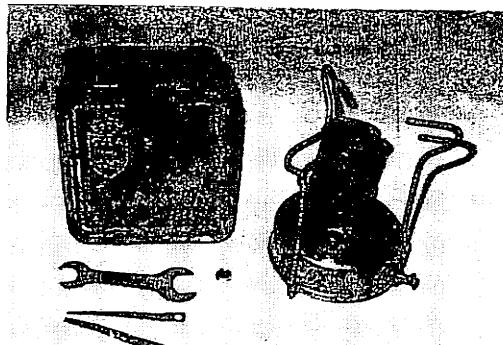
## 個人装備計画表は装備係 宮尾、丸山

①キスリング(大) 町田(中沢) ②ピッケル 町田(坂井) 大盛り(中沢) 丸山(中沢)  
③シュラフ 町田(河口) 丸山(水科) 蒔田(宮本)予備(小林) ④ワカン 蒔田(宮尾) 町田  
(中沢) 丸山(池田) ⑤オーバーシューズ 町田(中沢) ⑥オーバーズポン 宮尾(池田)  
町田(久保田) 蒔田( ) 丸山( ) ⑦ヤッケ 町田(中沢) ⑧ 山靴 町田(越田) 蒔  
田(柳沢) 帽子 マフラー セーター 上衣(カッターシャツ) 手袋(毛糸、布製ミトン) 靴  
下(毛糸、2足以上) サングラス スポーツオイル 地図、山日記、磁石 新聞紙(1人15  
枚以上) 風呂敷(ビニール布) マッチ・タバコ 時計 手ぬぐい・マスク ナイフ 筆記具  
学割 現金 印鑑 着替、若干(ズボン・下着等) ビニール製袋 針糸 アイゼンテープ ワカ  
ンのひも32 スミダワラ2枚 の如くである。

前表の如く、日が浅い新人でもザック、ヤッケ、オーバーシューズなどは持っているが  
彼は初参加の合宿がこの春山だったとのこと。29年の常念冬山といいこんな不備の装備で  
雪山に果敢に挑戦した先人の情熱と装備調達を意欲的に取り組んだ諸人に頭がさがる。

合計計画表には必ず、『食料』と『装備』がセットだったが昭和31年夏山合宿計画表現  
存最古：推定の計画書(宮下所有)の【団体装備】にはテント～其の他迄25項があり、当  
時の装備に記憶を蘇らせると

①テント2(7人用1、6人用1)・シート8・ザイル2・三ツ道具2揃・ナベ2(大1、  
小1)・コンロ1\*ガソリン2升\*メタ10ヶ・スコップ升1・ノコギリ2、ナタ1\*カメ  
ラ1・コッフェル1\*炊事道具一式(シャモジ、カンキリ、包丁2食器等)・懐中電灯  
(電池予備付)5\*薬品類\*針、糸の類(ハサミ、ゴム、毛糸、アミ棒)\*ローソク50本。  
うちわ5\*四本爪アイゼン\*絶縁テープ\*細びき\*寒暖計\*ハンマー25其の他。此の中で  
部所有の装備：テント1シート5～6枚綱かけした品、及び懐中電灯2、ラテルネ1、饭  
盒3～5が主なものでコンロは新しく購入したスペア、またガソリンをいれる容器4ℓ缶  
を手に入れるのに苦労したし、縦走で運ぶのも  
パッキンが緩くガソリンが漏って難儀した。テ  
ント・ザイルは教育or工学部or本部から借用  
が当たり前だし、シート、炊事道具一式(シャ  
モジ・オタマ・包丁・食器等)、ナベ・スコッ  
プ・ノコ・ナタ・懐中電灯・カメラ等『個人』  
で借りたり、家の道具など持参すると言う有様  
だ。また大鍋炊事をしたのもこの合宿が最初。  
大勢で饭盒が不足したのと昼食を同時に炊いて  
時間を稼ぐ目的で装備係が大ナベを買ったのだっ  
た。



—スペア一式—

同じく計画表の装備で挙げてある29品目の【個人装備】と衣類は次の通り。

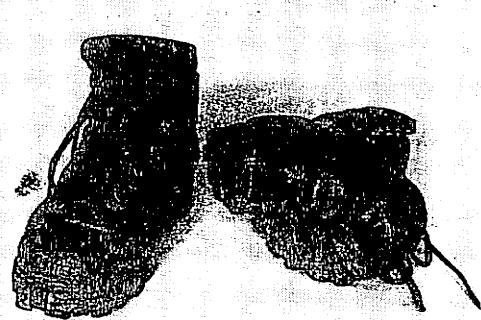
①キスリング大（宮尾）②ピッケル（　）③登山靴or軍靴、地下足袋orバスケットシューズ④ヤッケ飯盒スプーン、ハシ⑦シュラフ又は毛布（田島）M a P（黒部、立山槍ヶ岳、上高地）ナイフ Sketch-Book 筆記具（万年筆）時計 時刻表 チリ紙 新聞紙、20枚位 マッチ 切手 ハガキ 風呂敷2 手拭2 身分証明書 学割 印鑑 ビニール2 縄引 其の他 ひも Oil 靴ヒモ予備 磁石 化粧道具 29其の他 持病薬 四本爪アイゼン カトリ線香。DDT。

キスリング大（宮尾）、シュラフ又は毛布（田島）、ピッケル（　）等斜体と書き込みは此の部員が記入したものでザック、シュラフを兩人から借り、ピッケルは未定を示している。

【衣類】上衣なくもよしショッキYシャツ、予備肌シャツ2 セーター ズボン、予備（ズボン下）帽子（むぎわら帽子が良）靴下（予備 毛糸1 普通2）（マフラー）軍手。これ等装備は前述の春山と比べると防寒具〔オーバー、…ズボン、シューズ、ミトン等〕と積雪期用具〔アイゼン、ワカン及び夫れ夫れのテープ、紐の類〕並びに雪焼・日焼対策品など“…………期”により異なるが年度に因って変わっていない。ただキスリング…ザックアノラック…ヤッケ、オーバー手袋…ミトン、ゴーグル…サングラス、ランタン…ラテルネルモス…魔法瓶の品名は係の“思い入れ”で表示がかわっている。

この様に昭和34年頃まで、無積雪期の合宿装備計画には登山靴の代用品として軍靴が載っているが以後は単に山靴或は登山靴と記されている。私は軍靴を30年の秋山まで使用したが冬山、春山にはスキー靴だった。田島先輩の話によると当時は積雪期の山行でも軍靴位しか使えず、昭和29年、常念の冬山では三人が軍靴又は軍靴の改良したものだったとのことだった。新人だった久保田さんから聴いたのは、オーバーシューズ無しで軍靴を履いた冬山合宿の話。現在では考えられない当時の物不足を、体力と気力で乗り切った苦労話として胸を打つものがあった。

新人には先輩の靴が珍しくナーゲルが登山靴を、ムガー・クリンカー・トリコニー、セブンが鉢を表わす用語と知り説えるならALPS-BRANDの靴 セブンのナーゲルと心に秘めた。当時、靴を“ナーゲル”との呼び方をしているのは、男女ともS32年の新人、夏山合宿、夏のファーリア登山に、S32年男子新人歓迎、ファーリア、及びS34年新人歓迎、ファーリア、女子夏山、S34年度 女子春山等の装備計画表に記載されている。これら、登山靴をナーゲルと書いた装備係は特別の思いを込めて書いたのだと鄉愁を感じるのは私だけかもしれないが！その



—当時の登山靴（セブン）—

他、上原さんから装備等の件で寄稿があり<登山靴のこと>一読の程を。彼のイタリア製ビムラム底の「竹内の靴」を手にした時の気持ちは誰もが察しられると思いますが？

上記の“靴”の項に地下足袋が載っており、S31～34年の新人、夏山、秋山の各合宿の装備に地下足袋が出てくるが、私が実際に地下足袋使用例を知っているのは、S30年夏山合宿の水科さんで、地下足袋を上手く履きこなし機敏な行動の水科さんの姿が、今でもはっきりと脳裏に焼き付いている。

「初期の山行」項に合宿費用の調達、装備の購入のため“ボッカ”を、の記事があり自分も北穂小屋でボッカのバイトをした。夏山の合宿費や登山靴の調達の為遠見小屋で柳沢、祢津、丸山、中沢の4名がボッカをやったとも耳にしている。

それでは積雪期の合宿はどうだったか調べると各年度の記録、感想や所感で“装備が貧弱で疲労が強かった”“装備の貧弱さは行動能力を著しく弱めた…、…オーバーシューズが用意できず、三人共凍傷寸前の状態で…”“いつもの…貧弱な装備で、国境稜線にまで輪かんじきで行動等の記述あり、随所に装備が『貧弱』であったこと及び不足或は装備の調達、借用の記事が載っている。当時はどんな装備だったのか合宿計画書に記載されている、昭和32年度の春山合宿装備計画から辿ってみた。

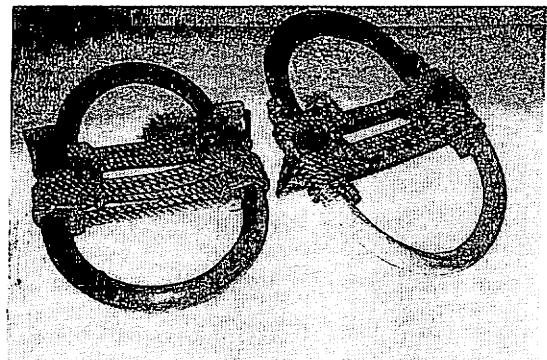
## I 団体装備

* ウインパー	3 教育	2 本部	1 ○ ブラッシュ	3 *	スコップ	3 ●	2 久保田	1
* マット	エアマット	スマダワラ	○ 絶縁テープ	1 *	シール	2	工学部から借用	
* ラジウス	4 部	2 田島さん	2 * アイゼン	6 *	スキー	2	小林、祢津	
* シート	部のを全部		⑤スキ-修理具	1	ペンチ・ドライバー・ネジ		針金 等一式	
* ザイル	5 30M、40M、ナイロン、樹脂		○ ラテルネ	1	⑥懐中電灯	5	二人に一本	
①三ツ道具	2種	ハンマー、カラナビ、ハーケン	10 ○ マジックペン	2 ○ 薬品	3	医薬品		
②テルモス	3 ○	コッフェル	1 * カメラ	2 ○	温度計	3		
③飯 盒	6 ○	ナベ、フタ	2 ⑦石油カン	4 ○	ポンプ	1 ロート	3	
○マナイタ	1 ○	食器	4 ジャラジャラ	新聞紙	各自持参	○ビニール布	荷札、網ヒモ	
④サブザック	4 ○	赤布棒20本	捨なわ 註	<丸付装備の個数は個人所有も含む。小林>				
ウンパーは当然の如く借用（教育、本部から）この頃の積雪金はベニヤ板（45×60位）に								
ペンキを塗ってマット代りとしたが《S56年度の春山-10人分、30枚の記録在り》マット								
はエアーマット…田島先輩からの借りもの1枚のみ。そしてスマダワラがマット代用品の								
定番、今合宿、個人装備で2枚が割当、小林は若里寮で仲間から『冬でも炭焼き出来るの								
か』と冷やかされながらも隣部屋のも数枚貰い用意したし、別の雪山だが、みやしたさん								

はわざわざ新品を購入して“俵”のみ持参で「どう使うのか」と家人に訝られたとも聞く。此の外に S 33年春、強化山行<団体、炭俵12枚> S 33年春、春山合宿<団体、ベニヤマット18枚 - 19.8kg><個人、炭俵 2 - 2200 g> S 34年度、夏山ファーリア会<個人、スミダワラ一枚>の記録が在り、S 30、33年度春山合宿の【感想】等にも載っている、ユニークでユーモラスな信大ならではの装備の一つだった。カメラの所有者は少なく、祢津部員から借用。

コンロの総称をラジウスと呼んでいたがスヴァアとアラジンは部購入の貴重品であり、ホエブス等二台は田島さんが友人や長野北高などから調達したとの記憶だ。アラジンやホエブスなどは石油、ガソリンの区別があって使用燃料を間違えたり、不完全燃焼でテントの内張りに煤がつき、朝方凍って落ちたのを“象のふけ”と嫌った覚えがあざやかだ。ザイルの30M 2、40M 1は部所有、本部からも借りた。ナイロンとあるのは小林が米軍放出品を購入したもので、現在のナイロン製ザイル（編み織）と造りが異なっていたがマニラ麻ザイルに比べ、比較的軽くアタック時使用した。コンロ・ザイル…上原さん<装備>参考シートは部のが全部でも5～6枚、個人のものや部員が借りたのが2、3枚。スコップやナタ、ノコの類まで個人が家のや、都合をつけて持参した時代だったし、此処に書いてないが団体装備のアイゼンは田島さん、松本工高から其ぞれ借りている。ラテルネはランタンのこと。食器具のジャラジャラは<包丁、しゃもし、お玉>を入れ持ち運びなど取り扱いが便利のように考案作成された三点セット入れ袋—酒屋の番頭の前掛けのような厚手の生地で大工の鑿入れ用具風に拵えたもの—水科さんが産みの親、S 33年秋山迄は使用的記録在り。食器24は一人3個でS 31年新人合宿頃から団体装備となった。

積雪期登山の必需品はアイゼン・ピッケル・ワカン・スキーシール、オーバーズポン・オーバーシューズ・ミトン・シュラフ等で個人装備とは云うものの団体装備並の扱いだ。是れ等の中でシュラフは大概放出品だが利点もあった。外人サイズでチャック（ファスナー）が同一で堅牢？な故、二つ繋げて三人入って寝れた。[放出品について牛山さんの文参照] 放出品では其の他、毛手袋（3ツ指）、木製背負子、3本指2重手袋、そしてナイロンザイルを使った。[上原さん<ザイル>の項を参照] わかんの思い出も多い。新人の私、丸山家でわかんを借りたがそれは大きくて難儀



—当時のわかん（現存）—

したし、二年の冬山合宿、スキーでの下山時、新人の小野山、大森転んでばかりで頭にきてわからんのほうがいいとスキーを担いで下った。また S32年冬、信大流と称し、爪を逆にして稜線まで登った猛者もいた。小林デザインによる脱着の便利さを追求した巻脚綱タイプ、オーバーシューズは行動中に緩み終わる頃には女子高生のルーズソックスの如くなり、評判いまいちで冬山に使用しただけの運命となり春山ではオーバースポンを揃え、アノラックと同じ鳶色のオーバーシューズをハヤマで造った。

昭和33年度春山装備計画では品名・キャンプ毎にきめ細かく重量表示がされており参考のためS32年と比較してみた。ガソリン：20升〔32ℓ - 26.6kg〕石油：10升〔4ℓ - 3.3kg〕ローソク：30本〔44 - 8.8kg〕〔メタ19● - 2.8kg〕が此の時の燃料計画で〔 〕内は'58年度春山。S33年度春山の品名・キャンプ毎の重量はそれぞれ、B C 31kg、C I 42kg、A C 49kgと表示され、総重量は122kgとなり、燃料を合計すると夫れ夫れ、B C 55kg、C I 52kg、A C 57kgで総重量は164kgとなる。露営用具一テント、3張 - 28.5kg シート・マット・ベニア、- 28.4kg スコップ・ブラッシュ・テントシューズほか小計68kg。エッセン用具一火器、5台 - 6kg ナベ・飯盒・マナイタほか小計15kg。登攀用具一ザイル、3本 - 9.5kg Fixザイル、3本 - 9.5kg Fixザイル、2本 - 9.2kg 三ツ道具、2組 - 2.4kg ザブザック・赤旗・アブミ外で小計31kgとなっており、別表（食料計画）からの食料総重量が208kgであり団体装備と合計して372kgになり個人装備14kgを加えると60.5kg／一人の興味深い重量となる。

これは一人前の山岳部員は60kgの荷物を背負うことが出来るという根拠の一つを示しているかもしれない。燃料には

(注) 1 ローソク使用量は1テント1日2／3本とする。

2 燃料の基礎使用量は1人1日4／3dℓとする。

3 メタ使用量は火器一台につき3日で1個以内とする。

との指示がある。

(注) <升>はS32年度春山まで載っており  
S33年秋山から記載はℓ表示。

また個人装備も品名別に重量が表示され

イ. 表を参考にして各人14kg以下になるよう努力されたい。

ロ. 借りた装備は特に良く管理されたい。と記されて



—ヤッケとミトン—

装備係（丸山・宮島）の人柄の一端が窺われる。此の個人装備に\*炭俵2-2.2kgが載っている。

装備の変遷調べる中、思い出すのはリーダーチョッキ（清水先生に戴く。）とピッケル。百瀬先輩から寄贈され代々引き継がれたライオンマークのピッケル、私は4年間も携えて山に入ったのだが、数年後シャフトを交換したと聞くが！いずれもその後、消息不明で甚だ心残りだ。

（小林 盛男）

### 女子部の装備 ……小さな思いで……

昭和30年代も前半というと、“今ほど装備らしい装備がなかった”というどころか、女性用の登山用品なんて何も無い時代だったように思います。

34年の冬山、西穂合宿の準備になり、オーバースポンやオーパーシューズなどが無くて、それにお金も無かったでしょう。自分達で作ろうということになったのでした。

当時、家庭科の免許取得注だった為か、先輩の命令で、私に白羽の矢？が立ち、型紙を作ることになりました。責任重大です。男子の使い古された、汗くさい見本とにらめっこしながら、やっとのことで型紙を起こしたのを覚えています。布地はテント屋から調達しました。テント地の水色が精一杯“女性用なんだ！”と主張しているようでした。

さてそれからです。学生食堂の古くて大きなテーブルの上で、ゴワゴワ硬くて始末に負えないテント地と、どう出来上がるか分からぬ型紙との格闘が始まりました。一杯三十円の素うどんをすすりながらの光景はさぞ周りの学生達に奇異なものに映ったことでしょう。皆で、ああでもない、こうでもないと言いながら裁断したのです。ようやく、手分けをして縫い上げたものが、何とか使えそうということで、私は心の中でホッと胸をなでおろしたのでした。あの苦心の作品、後輩達にも少しほ使って貰えたでしょうか。

装備で忘れられないのは“足りない”というより殆ど“持っていない”装備を先輩や友達から借りた事でした。女子部合宿の時は男子部から大量借用ということも、又その逆もありました。憧れのマイピッケルは3年の時のアルバイトをして手に入れたが、



写真は作成したオーバースポン  
とオーパーシューズ

それより必ず必要だったのはシュラフで、権堂の外れ、米軍の放出品を扱っている店で、朝鮮戦争の中古品シュラフを手に入れた時は「これで安眠できると喜んだものです。大変な日く付きの物だったとは露知らず…。今では思い付かないような物が団体装備には、ありました。

それは炭俵です。シートの下に下敷き床暖房の役目をしたのです。また当時の登山計画表を見て団体装備の中に、ジャラジャラなどと、

どうしても私には思い出せない代物もありますしがソリン一升とあ

るのも、いかにも40年前らしく、感慨深いものがあります。

ヤッケにしても今のように防水性、浸透性、防風性を持ち機能的に作られたものではなく、防水力の弱いアノラックを使っていました。積雪期の防寒下着も、羊毛や木綿の天然繊維が良いとひたすら信じていたのです。

全てに 今昔の感 深いものがあります。

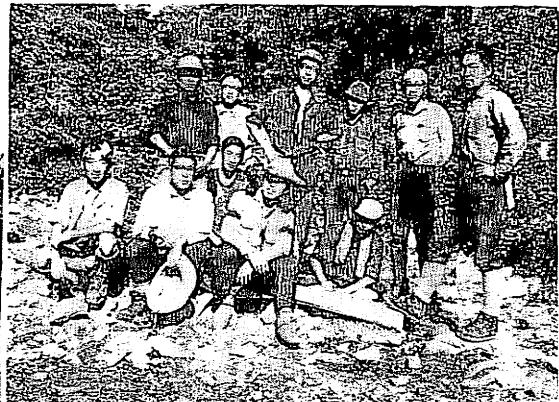
<個人装備の融通は合宿前の部会で個人の所有物調査をやり借りる相手等決めるのが通常だった。この頃はザックと靴、アノラック等先ず購入し次にシュラフ、ピッケルなどを手に入れるのがパターンでアイゼン、ワカンは中々買えなかった。>靴、アノラック、シュラフ以外は借りものが多い。

(大塚 寿子)

	アイゼン	ワカン	ピッケル	シュラフ	ザック	サブ
中村	小林	若狭	片岡	○	○	○
大塚	久保田	新名	○	○	○	○
栗林	小野	小野	大西	○	加藤	○
宮下	蒔田	大西	○	○	○	○

(栗林のザックは特大のを借りた) <小林記>

聖岳にて 1963. 7



夏山合宿より  
1963. 7